明治三十年二月二十四日發行

女鑑

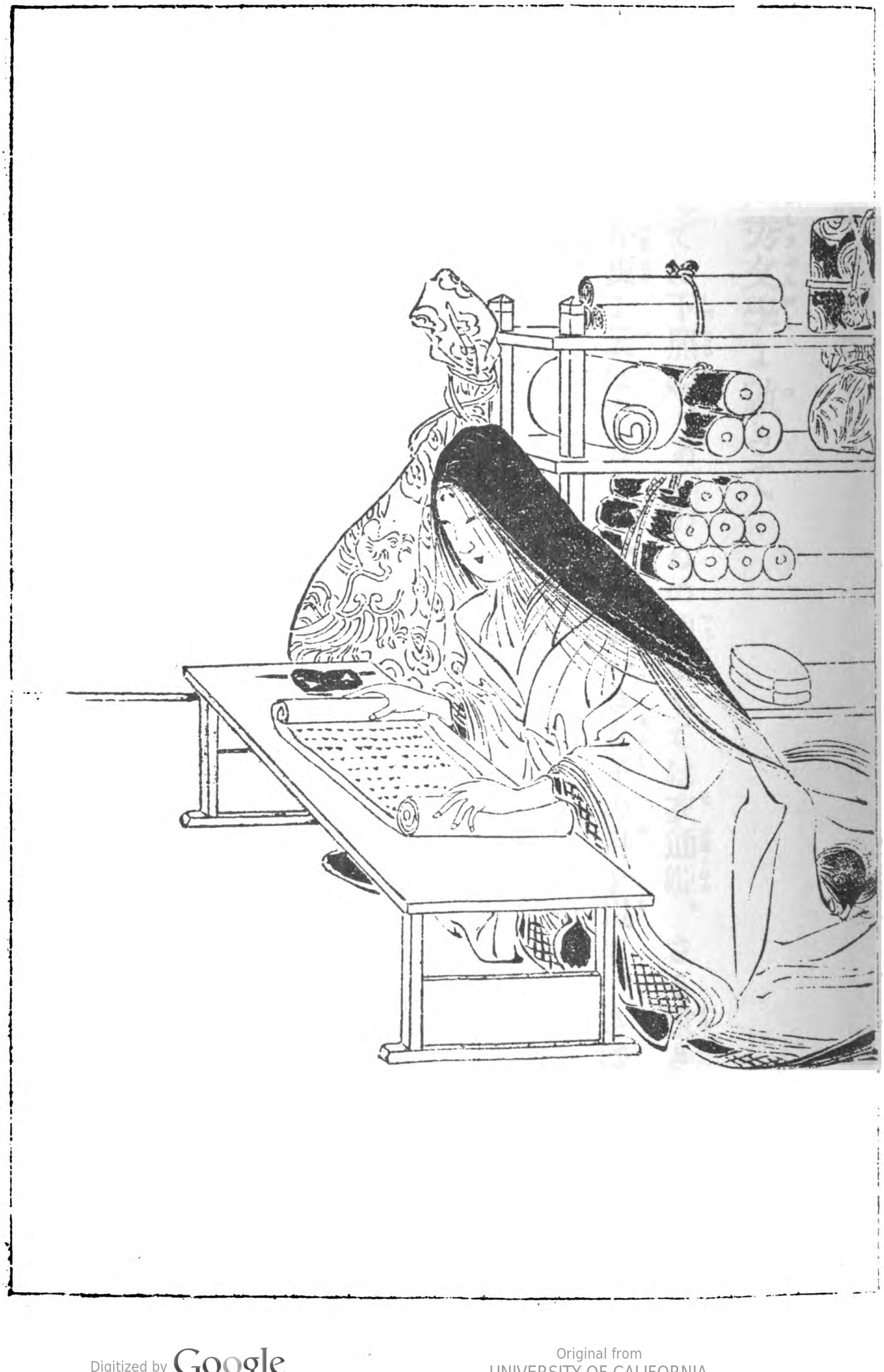
第百三拾六號

東京國光社

女鑑第百二十六號

目録

赤染衛門



閨秀文學に就きて

久方の天にしては下照姫、あらがねの地にしては衣通姫、さる遠き古への優れにたるきはは、今更に云はずもあれ、かよわき女子の身を以て、さばかり拔群の男子たちと立ち並びて、世にいみじき六歌仙とさへ數まへ唱へられたる小野の小町よりはじめて、若紫の色も薫りも床しくやさしき筆のあと故に、やんごとなきあたりより、其の名にも紫と負はせて、呼びはやされしともいふなる紫式部。さては、春は曙のめでたき言の葉は、文の林に傳へられて、後の世の歌人たちが心を鬪はすの題と成り、秋の夕ねどころへゆく烏を數へたる口つきばかりにも、世に雅なる文の手振りを教へ留めたる清少納言などを、いみじきものにて、一代の名姫才女ともいふべき者、昔時には少からず。實に我が國の文學史を繙けば、女流の作家のあはれに優れたる者少からず。たゞに少からざるのみならず、其の心

の薫り、詞の色、なか〳〵に、男子の作家をも凌ぎて覺ゆる者少からず。思ふに、我が國の文學史中、さばかりあはれなる女流作家の名を留むるを得たるは、其の源因は、さま〴〵ある事にしあれど、文學といふものは、元來一種の技術にて、自ら女性の德に適したるものなる事も、其が源因の一ならむ。れのれ、嘗て文學の德をあげて、而して、最女性に適したる技術なる事を述べたり。やがて、女性の知るべく樂しむべき最良き技術なることを云へり。我親しき令孃たちは、今も必ず記臆したまひてならむと思へば、今更に新しく云はず。吾人は、必ずしも女流の大文學者を望む者にはあらざるなり。されど、日本の優美ならむ女子は、よく優美なる文學の德を知り、父母に仕へ、良人に侍き、家庭を守るの餘暇に、これを女子が樂みとせんことを望む者なり。

近時、閨秀の文聲、やうやくに高くきこえ、閨秀小說は、再び世に披露せらるゝに至れり。吾人は實にこれをきゝて、必ずしも喜ばざるものには非ざるなり。如何となれば、これを以て、我が女子社會に、とまれかくまれ、文學の觀念の、やゝ

進み來れることを徵すべければなり。しかはあれど、吾人は、これを見て、必ずしも喜ぶものに非ざるなり。吾人は、實に、且つ喜び、且つ愁ふるものなり。如何となれば、文學には、高雅なるあれば、卑俗なるあり。優美なるあれば、醜猥なるあり。高雅にして優美なるものにあらば、其の利得は云ふばかりなきも、卑俗醜猥なるものならむには、其の弊害は、また限りを知るべからざればなり。

而して、吾人が殊に恐るゝ所は、妙齡の女子たちが、これが爲めに、我が盡くすべく守るべき職分の本末を誤ることを恐るゝ者なり。如何となれば、女子の職分と云ふは、吾人の常に云ふ如く、父母に仕へて柔和しき子となり、良人に侍きて賢き妻女となり、さて、やさしき家庭に立ちて正しき母と成るが、誠の女子の勉むべく守るべき本分にして、されば、かゝらむ道々を究めむとするところ、女子の學ぶべき道の本なれ。それならぬ技藝の如きは、女子の修むべき末の業にして、文學も然り。換言すれば、文學は、女子の本分に直接の關係あるものにあらず。

唯間接に關係せるのみ。されば、吾人は、女子が此の末事なる間接なるものに迷ひて、なか〳〵に、女子に直接の關係あり、女子の本分たるものを忘るゝ事あらむには、容易ならぬ大事なり。吾人は、これを恐れざるを得ざるあり。女子の文學、吾人は實にこれを喜ぶものなり。然れども、また喜ばざる所あるは斯の如き弊害あればなり。

されば、大かたの令孃淑女たちよ。汝の文學は、高雅にして優美なるを勉めよ。卑俗醜陋なるものは、決して、聞くなかれ、見る勿れ、云ふなかれ。而して、また汝たちが、日本の女子たる眞の本分を忘るゝ勿れ。

本居宣長

よつぶさに
いかでしらまし
いにしへを
やまさみふみの
よになか



友としての女子　妻としての女子

坂本三七郎

若し今日の女界をして一の化粧室たらしめば、吾人は、女界の人物を寫すに、二面の鏡臺あるを見る。花鳥水月之を寫して謬らず、其の眞相實体左右鏡裡に映し來る、而して此の鏡臺は所謂百尺の照魔鏡にして、心實の如何を現はし、其の容貌の美たり醜たり、衣粧の雅たり野たるは其の間に關せさるなり。

吾人は世の婦女子に逢ふこと多し、女教師と會し、妻君と話し、處女と談す。其の相會し相話すること益々多くして、兩樣の鏡面あることを確知す。醜女其の心必らずしも醜ならず、往々無鹽の如き賢婦あり。美女其の心必らずしも容貌の如くならず、花陰或は夜叉を宿するあり。吾人婦女子と相會話す、艷麗なる其の容愛すべく、其の論談する所縷々聞くべし、坐作進退頗る貴ぶべし。然れども、吾人をして心に服せしむ

ること能はざるもの往々にして然り。是其の學深からざるにあらず、其の辨人を驚さざるにあらず、然れども、畏敬の念なからしむるものは、果して何が爲ぞや。此の如きの婦女子は、多く女教師、女學生の間に見る、吾人は深く此の兩者に對して問はんと欲し、併せて、貴女と稱し、令夫人と名くる女子に對して、然る所以を問はん。學なくして人之を敬し、坐作行歩必ずしも女禮に合せず。然るに、人をして愛せしめ其の言語和にして侵すべからず、親んで狎るべからず、此の如くにして醜其の醜を掩ひ、美は益々美に、垢衣佳粧、吾人は見て一樣の觀をなす。是果して何の爲ぞや、無學短才の女子、人に敬せられて、博學多才の女子、人の侮を禦ぐこと能はず、玆に於てか、女界兩觀の奇生じ、化粧室中兩面の鏡臺を要す。是に於てか、女子教育界に、燃犀一炬の照魔鏡を待つや久し。

人自ら侮て、而して後に他人之を侮り、山玉を藏して自ら澤あり。と、吾人は是等の語を以て陳言套語となさず。彼の學あり才ある女子が、自ら侮を禦がんとして却て之を招くは、然るべき理なくして然るものなり。學薄く才乏しき女子が、謙にして人の畏敬を受け、親んで狎るべからざるものは、是亦然るべからずして然るものなり。嗚呼吾人は之を知れり、衣粧の美文學の彩ありと雖も、其の實なければなり。容色澤々

として艶なるも、何ぞ寶王の身中に藏するに如かんや。兩者の分る丶所は、學にあらず、才にあらず、一に女德の如何にあるのみ。女德欠乏せば、女性の萬能盡く廢して見るに足らず。若し學あり才あるを以て女子の特性を得たりとせば、今日の女敎師、女學生何ぞ佳婿を得るの遲きや、完美なる家庭敎育の處女、何が爲に婚を求むる人の多きや、之を以て、世の嫁娶の道は、女德の高下に重をなすを知るべし。人あり一女子と談ず、其の論に服し、其の學に感ず。而して其の人に問ふ、彼の女子學あり才あり君何ぞ娶りて妻となさゞると。其人首を搖して肯せず。其の肯せざるものは何ぞや、友として可なり。妻として不可なり。其の不可とするものは、一家の妻たる女德に游けれぱなり。女子の學ぶは、家庭の間子女を敎ゆるが爲のみ。之を學んで人の妻たる能はず、人をして友たらしむるも、愛して妻とするを欲せざるは、女德の欠點にあらずして何ぞや。是が爲に女學者獨棲の人多し。彼等は其の此の如きを悔ゆると雖も、之を囘護して女子獨立の論をなす。女子の獨立豈に國家敎育の望む所ならんや。豈人倫の道ならんや。豈又、天、男女を生ずるの性ならんや。辨せずして可なり。唯吾人は問はんとす、獨立の女學師嫁期既に過ぎて、空閨孤燈の下、既往を顧み將來を想へば、果して何等の嘆ある、獨り女子獨立の非を悔ゆるのみならず、幷せて學を修めたる弊

を悔いん。嗚呼何ぞ、今に及んで、女德を貞正にして女性の本に反るに如かんや。今日の女學界は、學の足ざるを患へず。藝の少なきを憂へず。一に女德の欠點にあるのみ。今日の女界は、人自ら人にして、學自ら學なり。故に男子をして、友として談ずるを喜び、妻として一家和樂を相倶にするを願はざらしむるは、一般社會の女學師に對するの傾向なり。今の學あり才ある女子をして、女德を厚からしめ、人をして敬して愛し、親んで一家の良妻賢母たらんことを願はしめぞ、女界兩觀の奇現象去て、の日本婦女子の特性を發揮するを得べし。吾人は化粧室內兩面の鏡を去りて、一臺菱花大和撫子の美を寫さんことを欲するや切なり。

女子敎育一斑（三十四）

三輪田眞佐子

其四　女子の体育

古人いふ、哲婦城をかたむくとかや。そは智識をのみ巧くすれぞこそ、本來女子に尊ふべきものは德行なれど、智識もなくぞその德を行ひ操を正すこと能はざるべし。故に、それのれは、女子を敎育するに就きて、先づ女德の養ふべきを說き、次に智識の修

むべきを述べたり。されど、智徳の宿る所は身体にしあれど、身体、苟も壯健ならざらんか、おのづから心に影響して、徳も美光を失ひ、智も活動を全くする能はざるべし。されど、茲に女子の体育につきものせんも、教育上必要なることゝならんかし。

おもふに、往時の女子教育は、専ら女徳をとき、女智をゆるかせにし、体育に至りては秋毫も意を用ゐざりけんかし。蓋し人事の錯雜ならざる時代には、なべて衣食住容易に、生存競爭はげしからざりしかば、精神の苦勞少く、筋肉の運動よろしかりけんを以て、勢ひ身體強健にして、殊更體育など云ふに及ばざりけんも、今は昔に異なりて、なべて人の筋骨纎弱に流れ、強健の道を講ずるにあらざるよりは、とても世に立ち事に當るには堪へざるに至る、これ、當世體育の忽にすべからざる所以なり。

見よ、往時は、一家の内君としいはゞ、閨門に坐して無爲に歳月を送るを得べかりけんも、當今は單に饋食を宰るのみならず、子孫を教育し、老者を慰め、良人を補佐し、以て一門の名聲を全うするため、世人とさへ交際をなし、餘力あらんには、女子の天性に適する區域内の人事をも果すなど、一般人類の事業につき、半は男子の行ふべきものにして、他の半は女子自ら營むべき大任を帶びぬるものを、女子若し不幸にも羸弱ならんにはあは、おその徳如何にうるはしく、その智如何にすぐれんも、これを施

すに堪へざることさながら幹なき枝に花を着け實を結び得ざらんが如し。まいて女子の身體は、子孫に遺傳すべけれど、女子の身體強健ならざらんには、國民の強健なることを望むべきかは。まことや、わが日本は、久しく鎖國の主義をとりて、世界の激潮に會はず、高枕安臥せし夢は、明治維新の開港とゝもにさめけり。いまや、知る人ぞ知るらん四面の海にたつ浪の音は、我が國民に何事を告ぐるか。將た歐米各國の、刃を磨ぎ兵を練るは、何事か慮る。もしくは、世界の學術如何に進歩せしか。工藝如何に發達せしか。あるは内地雜居も遠からずとかや。つらつらこれを思ひ彼を考ふれは、我が國の前途を憂ふるもの誰か民人体質の源なる母の身体如何をおもはざらん。されど、今日ばかり、女子体育の必要を感ずるはなし。おのれは、顔色蒼然たる婦人を見る毎に感慨の情切ならざるはなし。

なは、女子体育の必要は、その天職を盡すと、國民の運命を助くるとの二點に止まらず。必竟生涯の幸福も強健に基くものぞかし。試におもへ、身体羸弱なる婦女は、春秋の花紅葉も、以てその目を慰むるに足らず、山海の珍味もその口に甘しと感せさるべし。されど強健なる婦人は、朝まだき軒端に囀づる雀の聲だに、いと勇しう覺え、病床にありてきく鶯の音にもまさるべく、襴褸の衣秋風に吹かれんも、よく膚にかなへど、

藥湯をのみつゝ綺羅の服を裝ふより幾そばくかたのしからん。常に愉快の内に在りて、たとへ人より困苦憐むべしと言はんも、その心中こそ長へに幸福なれや。且つ身は父母の遺体なり、敢て敬せざらんやと、古き文にも見ゆ。げに父母は、つかのまもその子の健なることを祈らざるはなし。されは身体を强壯にするは、孝の道にもかのふなれ。しかのみならず、人は造化の陶育を受けて、天地の間に生するものなれば、なるべく身体の發育を遂げて、人分を盡すに足るものこそ、能く天道に報いるものなれ。

近來女子の教育やゝ盛なりしとはいへ、多くは智育のみ行はれ、体育などは顧みざるものゝ如し。現にいつれの女學校にても、讀書、數學、地理、歷史、もしくは理學などの學科を敎ふるなれど、こは専ら智識を養ひ、傍ら女徳を啓發するにて、勿論体育の助となるものにはあらじ、たゞこれ等の智識より、事物の道理を知り得て、間接には身命を保存するなるべけれど、こを實際に行ふこと難からん。譬ば、生理、衛生の智識を實地に應用して、身の發育をはかるもの少きは事實ならずや。且つ体操科のごときは、その學則に設けあらんも、こを實行する女學校少きがごとし。偶々實行するとせんも、それのみにては、いまだ女子体育の目的達しがたかるべし。

蓋し女子の体育を完全になさんとならど、種々の方法、及び注意相待ちて、始めてその功を期すべきなり。すなはち、學校、及び家庭の敎導宜きを得るのみならず、社會の風習、幷に自個の心得さへ相ともに助けてのちに大成すべけれど、女子の体育を講するに就きては、逐一これ等の關係を述べざるべからず。

これより、女子の体育に必要なる思想、及び事項をものせまほしうなん。



史談

赤染衛門

鹽井ふく子

歷史の世に欠くべからざることは、今更云ふまでもなけれど、もし史書なかしせど、日の本の開け初めし此方、皇統れんめんとしてつぎませる、天つ日つぎの、やんごとなき光りも、かゝやき傳はらねど、敷島の大和の國ぶりを守り行く臣の道もわかず。天には日月ありながら、世は暗黑となり、地にも道路ありながらわく方もなき荒野ともなり

ぬべし。されど、かけまくも畏けれど、古の君のかしこき御叡慮にも、とく心付かせ給ひて、史はかくべからざるものとして、早くもの知りたるものに仰せて、代々の史をしらせしめ給ひつ。日本紀をはじめ日本後紀、續日本紀、續日本後紀、三代紀、文武紀など六の史を代々につくらせ給ひたれど、神代よりの日の光りも、くまなきさまさへ、詳かに知らるゝぞありがたき。されど此の勅撰の史どもは　孝光天皇の紀にとゞまりて、其の後つくらせ給はねど、あかぬ事に世の中思へりけん、當時已が時々しるせる日記どものありしをあつめて、作り出しゝ榮花物語、早くは世つぎ物語と云ひし物語文、假名文字にうつし出されて、やがて六國史のあとをつぎしいとめでたき。そも、此の榮花物語作りし人は、赤染衛門と云ふ昔の才女なりし事は、誰れもとくにしろしめす處ならん。

流石に平安の朝、天下太平無事、右文の代なりしかど、男子は更にて、女子にも文の道にすぐれたるが多く、彼の君むらさきの色に香に、やさしうそめなしゝ式部をはじめ、清原の清きくさぐ〵書き流したる清少納言、その外、敷島の道もて名を立てし、和泉、中務などかず多くありしが中にも、赤染衛門よ、そがつくりし榮花物語、あだなる墨色にもそめずして、その世のさま、藤原の榮花のさまをなど、細やかにうつしたる、萬

づ目の前に見るが如くつらねたる、ひとへに赤そめの赤き心も見えて、たふとく仰がれぬ。

此の赤染衛門は、もと、平兼盛の女なりしを、衛門の母なりける人、懐妊中離縁となり、家にかへりて衛門を生みぬ。その後、その女子を携へて、再び撿非違使赤染時用方に嫁せしに、時用これを養ひて、己が子となせし故に、赤染衛門と云ひけるなりとか。

赤染衛門、初め攝政道長の妻倫子に仕へたりしよしなりしが、のちに大江匡衡に嫁ぎぬ。

夫、匡衡は世に秀才の聞え高かりける文章博士にして、幼より才高く、七歳にして書をよみ、九歳にして詩を賦したりとぞ、學をその祖維時に受け、長ずるに及びて博洽、當時よく及ぶものなし、和歌をもよくしぬ、天延中、文章得業生に擧げられ、秀才に補せらる。天元二年、對策し、尋で衛門權の尉に叙せられ、檢非違使となりぬ。時の人皆云ふ、秀才にして宣旨を蒙むる、けだし特例ならんと。後に文章博士となり、帝の讀書に侍し奉り、また敦康親王の書をよみ給ふにも侍し奉りて、侍讀となりぬ、さむかり匡衡、帝にもやんごとなきものにされ、世に稱へられながら、位才にたへずと

思ひ、職を辭せんとし、屢病を以て請しかどえず、每にその轗軻を歎せしとぞ。嘗て朝列と舟を泛べて大井川に遊び、各和歌をうたひし時も、匡衡

河舟にのりて心のゆく時は
沈める身とも思はざりけり

とさへ讀みしほどにて、每時心にいとひ居りしは、さながら此の一首にくまれなん。

或時藤原公任、まさに中納言を辭せんと欲して、當世の名儒、紀齋名、大江以言に屬して、辭表をつくらしめしに、皆己が意にあはずとして、更に匡衡にこを書かんことを依賴せしに、匡衡家にかへりて、いたく鬱ぎをる樣子なるに、妻女赤染衛門、いぶかしく思ひ、何をか思ひ鬱し給ふ、御心のすぐれさせ給はぬにやと尋ぬれども、夫は頭をさげしのみにて答へはなし。何を、さは、鬱し給ふ。御心のすぐれさせぬにもましまさずを、如何なる思ひのあまらせ給ふ事のれはすにや。聞えさせ給へ。心にかゝり侍りと、重ねてとひしに、夫、太き息をつきて、先きに公任より依賴されし事を語り、かつ曰く、齋名、以言の才學を以てだに、なほ心を滿す事能はず、我が駑才、必ず彼れの心に叶ふほどの表も出來ざれど、筆とる身の耻辱、口惜しくも思はれて、かくは思ひに沈み居るなりと云ひしに、赤染も共にやゝ沈みてありけるが、やがて節か

にのぶるやう、つら〳〵思ひ侍るに、その公任公は、衿飾の意の深き人と思はるれど、今盛に門地の貴きを述べて、ひそかに官位沈滯の意を露はし給はゞ、如何に候はんと云ひしに、夫もげにと思ひけん、その意にまかせて筆をとりしに、公任果して悦んで、その表を用ゐたりしとぞ。赤染衛門の穎悟、よく夫を助けしものと云ふべし。

赤染衛門、また敷島の道にもいたく堪能にして、和泉と聲名を爭ふほどなりきとぞ。その詠みし歌ども六百首もありて、後世つくられし集どもにもかず入りて、見るべきものゝいと多し。

秋法輪に詣でゝさがのゝ花をかしかりしを見て

秋の野の花見るほどの心をば行くとやいはんとまるとや見ん

つとめてかへるに空いみじう霧亘るにひぐらしのなきしに

いとゞしくきりふる空に蜩のなくや小倉のわたりなるらん

津の國にいきて云ひける

こひしさに難波の事もれもはねず誰れ住吉の松と云ひけん

殿の倫子の春日にまひらせ給ひし道にて伊豫守兼盛が娘花を折りて歌よみてれこしゝ返し

山がくれ匂へる花の色よりもをりける人の心をぞみる

一條院御覧じに亘らせ給ひしになやむ事ありて御供に參らざりしかば歸らせ給ひ、ちりたる花を包みて給はせたりしに

さそはれぬ身にだになげく櫻花ちるを見つらん人はいかにぞ

里なる母上の御前の仰せ言にて花の盛りなるを見せまほしくなんとれはせられしに

もろともに見るよもありし櫻花人づてにきく春ぞかなしき

元輔がむかし住みける家の傍に清少納言のすみしころ雪のいみじうふりて隔ての垣もなく仆れて見わたされしに

あともなく雪ふる里のあれたるをいづれ昔の垣根とか見る

和泉式部と道定となかたがひて内の宮にまゐるときゝてやる

うつろはでしばししのだの森を見よかへりもぞするくずのうら風

六百首こと〴〵くかきたてんもなか〳〵なれど、此處にはわづかに數首を錄しぬ。

さて、赤染衛門の子擧周、曾て重き病にかゝり、久しう癒えざりしに、衛門いたりて、く心をいため、住吉神社に己が身を以て、子供に代らん事をねぎかけ、三本の幣を奉

各之に和歌を附す、その歌に

たのみては久しくなりぬ住吉のまつ此の度は志るしなん見せよ

千代へよとまたみどり子にありしよりたゞ住吉の松をいのりき

かはらんと祈る命はをしからでわかると思はんほどぞかなしき

その夜、白髪の老翁出で來りて、此幣を社内に納むと夢み、後、その子の病癒えたりとぞ。誠にや、之れいたく我子を思ひ、神を信じたりし思ひねの夢にやあらん。神は心なり、之れ一心の己が神に貫かれしならん。女子には江侍從と云ふありて、之も和歌をよくすと云ふ。

さても、此の赤染衛門よ、あつぱれ男子にも敎へんばかりの才學ありながら、淸女の如く口やかましとも評されず、和泉の如くけしからぬ人とも稱へられず、はた、日本紀の局の如き字をもとらずして、たゞれとなしき才女の名を殘せるは、めでたしともめでたく、殊に日記、漫筆に放言を吐き、艶語をつらね、あらぬつくり物語に淫靡の章をなせる女子文學の中に、まことの歷史をつたへたること、類まれなる才女とや云はまし。

米村氏の女の事

薫風仙史

むかし大坂の役に、大野治長、米村權右衛門に命して、夫人徳川氏を東軍におくらしむ。治長一人の女ありけるを、この徳川氏につけて、從ひてゆかしむ。權右衛門またおのか女を治長か女に從はせけり。さるを治長か女ふと疾にかゝりて、打ちふせりけれは、權右衛門はこをみとりながら、京師にゆきて、疾を養へりき。權右衛門か女、生れなから心順かに、謹ふかくして、世のなみならす。父とともに、かたはらを離れすして、湯よ藥よと、晝夜をいはすかしつきつかふ。かくして日を經しか、後疾あつしくなりて、つひそのかひもなくてなき人數に入れりけり。權右衛門もかなしみなけきなから、さてのみあるへからねはとて、火葬にすとて、とりまかなひたりけるに、女なけくこと一方ならす。忽その火のほの中に身をなけて、棺をいたきて、うせにき。こを見るもの酸鼻せさるはなかりき。權右衛門更になけきを重ねて、なみたなからに骨を收めて、高野山に葬れりきといふ。そも〳〵今の世より見れは、心狂へるに似たり。しかれともそのかみは、節を守りてかはらさりしこと、今の世の淡々しきに似す。こを見てこれにならへとにはあらねとも、當時の人の心のありさまを察すへし。きのふの主もけふは路傍の人の如くなるは、我か國の古風にあらすかし。

家政

たちぬひ

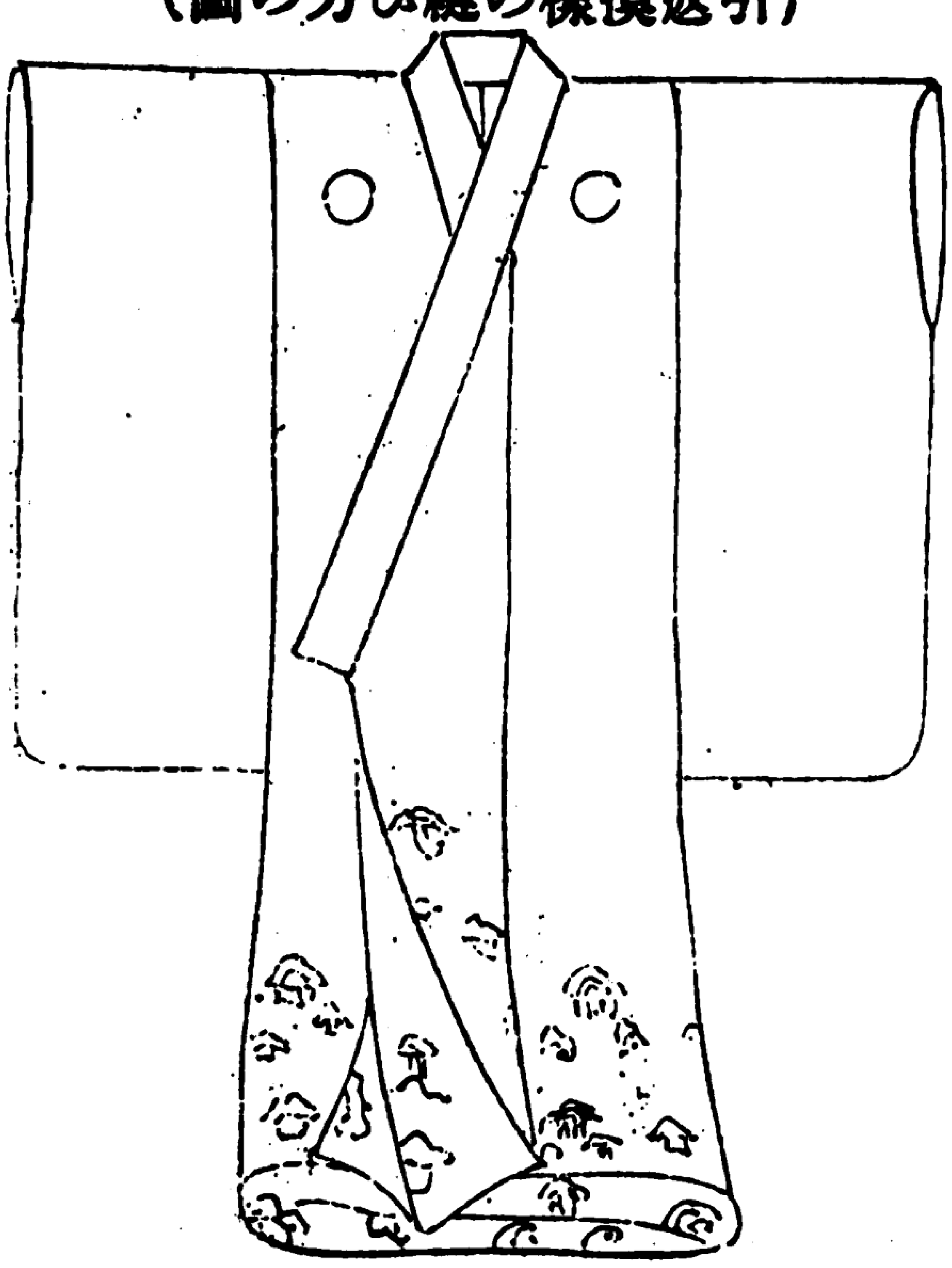
西山たい子

(六十五)引返摸樣の縫ひ方

引返摸樣とは摸樣のうらより表にかゝりしを云ふなり、また裏摸樣は裏より吹までかゝりし摸樣なり。また無地にて引返もあり。すべてすそうらの表と通したるを云ふなり。

まづ例の如くに四袖をぬひれき、それより、背、脇をぬひ、裾のぬひこみをよくはかり見て、背脇のぬひめをよく合せ、裾を空縫となし、胴裏をぬひ、丈をくらべて、裾の先に合せ、前巾を裏表ともしるしれきて、それより衽をとり、摸樣をみて褄方にぬひ、

(引返摸樣の縫ひ方の圖)



裏の裾先をはぎつけ、それより表より裏まで衽をつけ、並の綿入ものゝ如くにして縫ふべし。上等物のぬひ方のあしきは見苦しきもの故、よく心をつけてぬふべし。寸尺等は別にしるさねどその人々に應じて宜しきに定むべし。

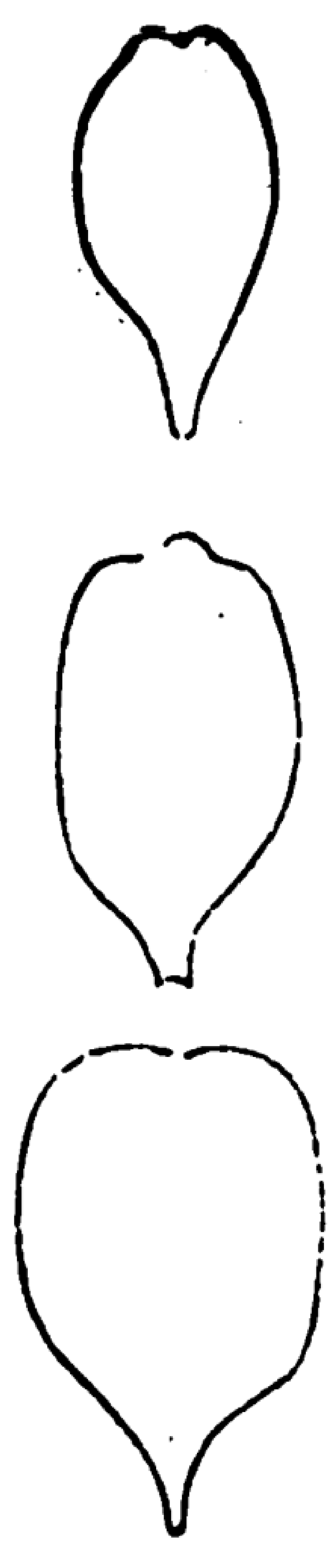
造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

姫海棠

滿開花の造り方。花辨は羽二重(薄糊を引く)、又は寒冷紗(其の儘)を、第五十八圖の如き形に、大五枚、中三枚、小二枚を造り、之を水に濕して能く絞り、一々に重ねて、其の中央をピンセットにて縦に固くさはみ、辨の右と左を、「ローザミン」と「フロクシン」とを等分にして薄く溶きたる液にてぼかしにそめ、乾きたる后、辨の中央を筋鏝にて引き、其の左右は、辨鏝の小にて少しく縮ませ、元の處は仝しく辨鏝の中にて少して窪みを付く。中小の辨は、大辨よりも縮みを深く造るべし。

第五十八圖



萼は、青紙の上を「スカレット」にて染めたる紙を、櫻の萼と仝し樣にして、其の軸を長かく造り、軸には糊を引きて固め、又は中眞に極小さき眞鍮の線金を入るゝもよし。蘂の造り方は、既に載せたる梅と仝し事なれば重ねて記さず。さて上の如く造りしものは、初め大辨五枚を萼に付け、その內部に、中三枚

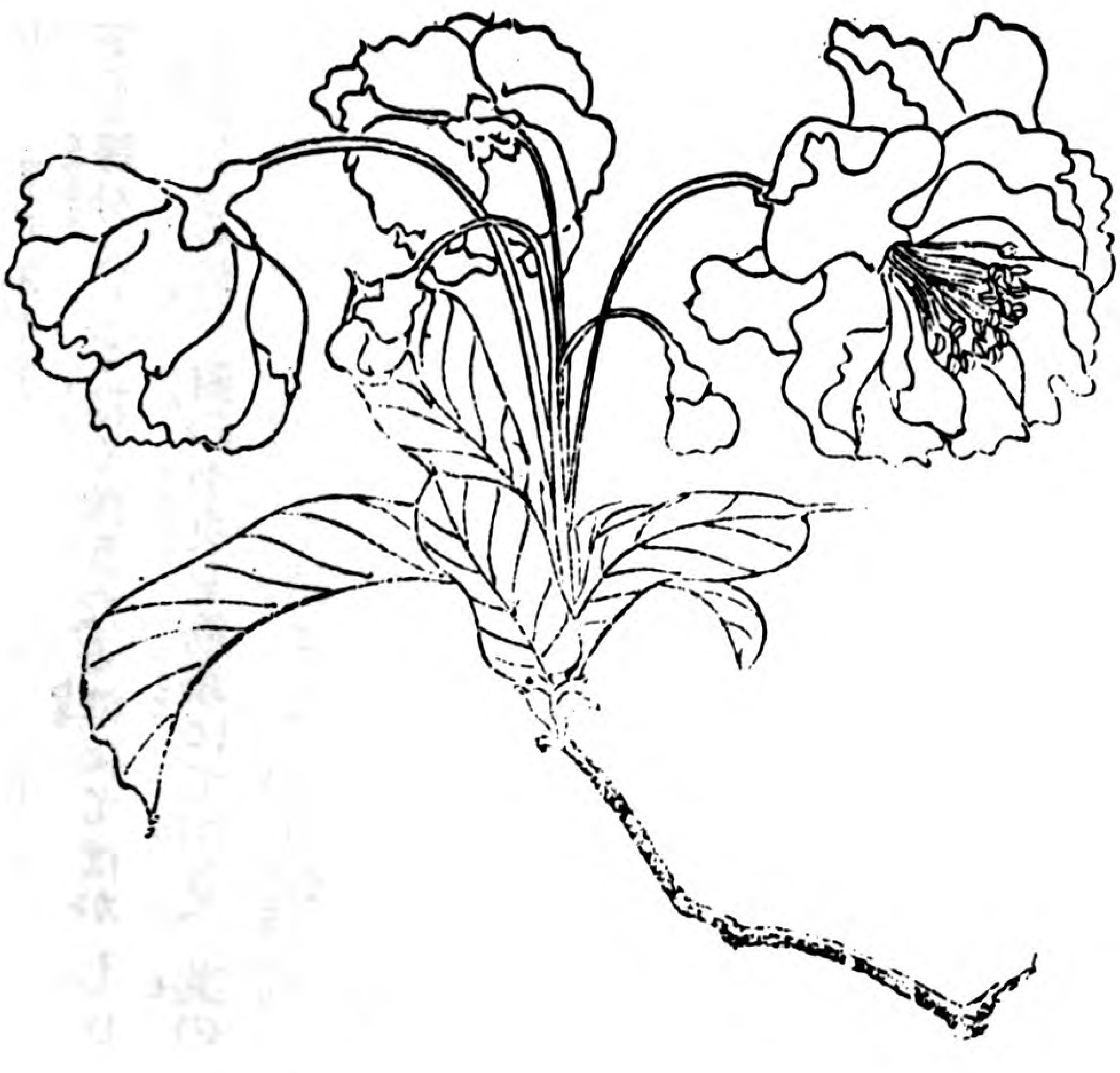
と、小二枚を宜しき配りに付け、后蘂を付く、かくして滿開花一輪を得へし。

半開花の造り方。半開花は、瓣鏝にて、花瓣の元を少しく凹まし、滿開より少しく小く造るへし。其他は凡て滿開と仝し。又紅梅の半開の如く造るもよし。

蕾の造り方。羽二重、又は薄美濃紙を、滿開と仝し色にて少しく濃く染め、梅の蕾と仝し樣にして造るへし。

葉の造り方。葉は、薔薇の葉と仝し樣に、「マセンタ」五厘、「オウラミ」五分、「グリン」二分五厘を合せ、明礬少許を加へたる液にて染め、實物を見合して適しき大さに、大小數種を造り、小及中は全体を「スカレット」にて極く薄赤くはかしに染め、大なるものは其の緣を仝し色にて染むへし。葉柄は、靑紙を「マセンタ」にて、薄赤くぼかしたるものを、細き針金に卷きて、葉の裏より付く、后筋鏝にて葉の筋を付くへし。

第五十九圖



纏め方は、以上の、滿開、半開、蕾などを、六つ七つ計りあつめて、其根に、葉の小なるものより漸々大なるものを付け、莖には眞に竹の圓く削りたるものを入れて、「カシトラバル」にて染めたる紙を其上に卷くべし。第五十九圖參照

だいどころ

印度製「カレー」

羊肉、鷄肉、犢の肉の中、何れにても好む所の最上の肉半斤を骰子目にきり置、次に大匙一杯の「カレー」粉、及び米利堅粉に、小匙一杯の食鹽を加へて能く混和せ、一個の球葱を細かく刻みて、「カレー」の混和物と共に、「シナー」鍋に投れ、十五匁の牛酪を落し、淡褐色になるまで、油煎し、一旦、其混和物を鍋より出し、其あとへ、切り置たる肉を投れ、十分間程、文火にて煎り付けたる後、又之を取出して脂肪分を去り、別の鍋に移し、之れに「スープ」一合五勺を注して、暫時、蒸煮になし、更に大匙一杯の「カレー」粉を加へて能くかきまわし、前の混和物と、淡く刻みたる一個の林檎とを投れて攪交せ、鍋に蓋をして一時間程文火にて蒸煮にしたる後、飯と共に盛りて出すべし。

魚類「カレー」

魚類は、鱸、鯖、鰈、鯽の類を、常の如く拵へ、皮を剝きて其の能き肉を小片にきり置き、骨は程能くきりて鍋に投れ、水三合、食鹽少量を加へ、十四五分間煮出して、「スープ」を製り、別の鍋に、球葱一個、林檎一個を淡く刻みて投れ、之れを大匙二杯の牛酪にて煎付け、更に小匙一杯の「カレー」粉と、三

匁の米利堅粉を加へ、四五分間文火にて攪動しながら煮たる後、前の「スープ」を投し、葱軟かく、混和物どろ〳〵になる迄徐に煮て、魚の片肉を投れ、文火にて更らに煮ること十四五分間にして、肉を崩さぬやうに魚を皿に取り、飯を盛りて出すべし。

蝦「カレー」

海蝦の大なるもの一個(小なれど二個)、斑節蝦なれど三四個の皮を剝ぎ、好き肉のみを小さく切り置き、蒜の小球を細かく刻み、乳鉢に投れ、之れに、小匙一杯の米利堅粉、少量の食鹽、大匙一杯の「カレー」粉と七匁の牛酪とを加へて能く摺り交せ、燕鍋に、七匁の牛酪と、良き「スープ」一合を投れ、此中に前の混和物を加へて、文火にかけ、能混和る迄攪動しながら煮たる後、蝦と細かに刻みたる球葱一個を投じて、尚煮ること十四五分間にして用ふべし。



新古今和歌集講義　(六)

鹽井正男

題しらず　山邊赤人

あすからは若菜つまむとしめし野に

昨日も今日も雪は降りつゝ

○この歌は、万葉集の八の巻にも載れる歌なり。○山邊の赤人、聖武天皇わたりに存命せし人にて、奈良の朝にきこゑたる歌人なり。貫之が古今和歌集の序文にも、人丸赤人が上に立たむこと難く、赤人は人丸が下に立たむことかたくなん有りけると云はれ、柿本の人麿と共に、世に和歌の仙と云ひはやさるゝ人なり。○若菜、「菜」といふは、草の類の中にて、人のよく食ふべき物をさして、すべて云ふ詞にて「若菜」は、やがて、食ふべき草の、春の初め生ひ出でたるばかりの若きを云ふなり。それを摘み取りて食ふなり。○しめし野、「領したる野と」云ふことにて、わが若菜つまむと思ひ定めたる野といふ意に云へるなり、○降りつゝ、「降りつ降りつゐり」の意なり。

○一首の意は、明日からは若菜をつまむと、わが思ひ定めたる野に、昨日も今日もなほ雪は絶えず降りつ降りつゐるよとながめうたへるにて、雪げの天なほ名殘つきぬ初春のけしきをうたへるなり。

天暦御時屏風の歌　　壬生忠見

春日野の草は緑りに成りにけり
若菜つまむと誰かしめけむ

○天暦、村上天皇の御代なり。○壬生忠見、古今和歌集の撰者の一人なる壬生の忠岑が子なり。父に劣らぬ名人にて、これを以て、初めて醍醐天皇に召されたるばかりの人なり。天暦に、宮中の歌合せに、平の兼盛に勝たれたるを悲みて、そが爲めに憂死したることは、世の人のよく知る所なり。○春日野、前に云へり。○若菜もしめけんも前に云へり。○誰か、「か」は疑ひ問ふ意の詞なり。

○一首の意は、春日野の草は青々と生ひ出で、、緑に美はしき野邊と成りたるが、あはれ如何なる人が、若菜を摘まむと思ひ定めたる所ならむ。あはれ美はしくゆかしき野邊の景色よと、うら〳〵と萌え出でたる春日野の美はしき景色を眺めよろこべる歌なり。

崇德院に百首歌奉りける時春歌

前參議敎長

若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野の
　とぶひの野べの雪のむらぎえ

○前參議敎長、「參議」は大政官の次官にて、大臣大納言なぞと共に天下の政事を議せし官にて、「前」は、もと其の官に在りしにて、今は在らざる故に云ふなり。「敎長」は藤原師實の孫にて、歌にも書にも工みにて、崇德上皇に寵せられたる人なり。○春日野の飛火の野べ、「飛火」と云ふは、今いふ「のろし」といふ如き物にて、高山の上に樓を築き、はねつるべの如き仕懸けにして、變事あらん時に、夜は火串を飛ばして、それを報じたるものなり。春日野には、此の飛火を置かれたれば、春日野の飛火の野べと云へるなり。○雪のむら消え、まだらに消え殘りたる雪のあとなり。○一首の意は、やゝ若草の萌え出でたる春日野に、所々にまだらに消え殘りたる雪のさまは、さながら若菜をつむ子たちの白栲の衣の袖の如く思はるゝよと云へる意にて、此の歌は、彼の古今集に見えたる「春日野の若菜つみにや白栲の袖ふりはへて人の行くらむ」とある貫之の歌なぞより思ひ合はせてよめるなり。

延喜の御時屛風に

紀貫之

行きて見ぬ人もしのべと春の野の
かたみにつめる若菜なりけり

○延喜、醍醐天皇の御代なり○紀貫之、古今和歌集の撰者、土佐日記の作者、歌文の達人、和漢の學者、よく人の知る所なれど、新しく云はず。○しのべと、思ひ慕へといふ意○かたみ「その形として見るべき物」といふ意の詞。
一首の意は、この摘み來れる若菜は、共に行きて見ざりし人も、これを見て、春の野のあはれに美はしく面白かりけるを、よそながら思ひ慕へとて、その春の野べの形見にとて摘み來れる若菜であるよといへるにて、春の野に遊びに出でて、あまりに面白かりし興を歌ひ語れるものなり。

述懷百首よみ侍りけるに若菜
皇太后大夫俊成

澤に生ふる若菜ならねどいたづらに
年をつむにも袖はぬれけり

○俊成卿の事は前に云へり○澤に生ふる若菜、水邊に生ふる菜なれど、芹の類ならむ。○いたづらに年をつむ、官位なども進まず世に沈淪して年を經ることをいへるにて、「つむ」は若菜を摘むと、年を積むと同音なるより巧みたる詞のあやなり○袖はぬれけり、これも愁みの涙に袖のぬるゝと、水邊の菜をつみて袖のぬるゝとを工めるなり。
○一首の意は、澤邊の若菜を、下り立ちて摘めど、衣の袖の濡るゝものなり。されど、澤邊に下り立ちて、菜をつむにはあらねど、さはいへ、かやうに世に沈みて年を經れど、やはり仝樣に、衣の袖は濡るゝものなりといふ意にて、若菜によせたる述懷の歌なり。つむといひぬるゝといふ詞より

思ひ工める歌にて、新古今の巧みなるわたりのけしきも見ゆる歌なり。

漢文學講義（三）

大林弘一郎

朕以寡弱、夙承聖緒、日夜怵惕、懼天職之或虧。第二節

乃祇鎭祭天神、地祇、八神、曁列皇神靈于神祇官、以申孝敬、庶幾使億兆有所矜式。第三節

謹みて案ずるに、我が　今上天皇陛下は、いとも英明に渡らせ給ふことなれども、御謙遜の御詞を以て、かく、寡弱を以て、夙に聖緒を承け、云々と宣ふは、御祖宗に對し給ひて、自恭敬謙抑せさせ給ふものなり。寡弱とは、寡は寡徳といふことにて、徳少きをいふ。寡人、寡君など、運用することありて、皆寡徳の人、寡徳の君といふ意なり。弱は、幼弱の弱なり、少小幼稚の時の意なり。今上天皇陛下は、御幼少にして、御位に即かせ給ひし故、かく宣らせ給へるなり。夙にははやくよりなり。聖緒とは、聖皇の御遺緒との意にして天位のことなり。天皇陛下、御歴朝の御大業の後をうけ承がせ給ひしこと故に、日夜に怵惕して、御心の中に畏れ愼み給ひ、天下萬姓を綏んじ治むべき　御天職を、或は懈り虧ぎ給はんことを懼れ給ふとなり。これ、實に、我が　天皇陛下の、御祖宗の御遺意を深く奉体せさせ給ひ、天位天職天業を重んし給へる叡慮のいとも深遠宏大なることを察し奉るべし。

かく天下万姓の事に御心を厚うし、御祖宗の御遺業を重んじ給ふが故に、御祖宗を慕はせ給ふ御心いと切にして、乃つゝしみて、天神、地祇、八神、

及、列朝の　皇神靈を神祇官に於いて鎭め祭り給ひ、以て御孝敬をそれ〴〵の神靈に盡くさせ給ふなり。かく孝敬を神祇に盡くさせ給ふも、自天下の萬姓億兆の臣民をして則り式る所ありて、皆祖宗の御遺澤を欽戴追念し奉り、且各々その祖先を禮祭敬奉すべきことを知らしめ、人倫の大本たる孝道の大標準を明に知らしめんとの叡慮に出でたるなり、我が　天皇陛下の尊き御位にあらせ給ふすら猶孝道を重んじ給ふことかくの如し。況や之か下となるものに於いてをや。

抑、天神地祇八神及　皇神靈を宮中に御鎭祭あらせらるゝ御事は、實に神代以來御敬神の御趣意を奉躰し給へるものにして、明治維新の初大政古に復し、古の如く神祇官を設け、諸官の上に置き、專祭祀の事を掌らしめられしが、幾もなくして、この官廢せられたれど、皆宮中に奉安したり。

○天神とは、天の御中主神。宇麻志阿志訶備比古遲神。天之底立神。國之底立神。豐斟渟神。宇比地邇神。須比智邇神等

○地祇とは、大國主神。月夜見命。須勢理比賣命。天之穗日命。天麻比止都禰命。宇麻志麻遲命。火須勢理命。大山祇神。大渡津見神等。

○八神とは、神產日神、高御產神、玉積產日神、生產日神、足產日神、大宮賣神、御食津神、事代主神の八座を申すなり。

我が國は、もと、敬神を以て國を建て、祖宗の子孫に於ける、子孫の祖宗を仰ぎ奉るも、皆一氣の貫通せるものにして、千萬世と雖、猶一日の如し。故に、其の德を修め、その業を紹き、而してその家の長久を謀るは、これ孝子の本務にして、而して自　皇室に對して忠節を致すものとなるなり。また或は官につき、職を奉じて、一意奉公の誠を盡

くすことは、之また祖先の君に忠誠を盡くし、遺志をつぐものにして、自孝行となるなり。然れども、これ皆、君民その祖を同じうし、孫祖その氣を一にする我が國體の純美なるに原由せざるはなし。吾人臣民は、この良風美俗ある御國に生れ、深仁洪徳ある大君の御政の下に棲息することあれど、必萬一の報効を謀り以て臣民の分義を全うせざるべからず。

（つゞく）

漫録



國字孝經

あ、ま、

又いにしへの賢き御門と申すも、御ふるまひ道理をうしなはせ給はず、下の滯りなくまなき御心は、鏡をかけたらんやうにて、天地の御神も感じましまして守らせ給ひつれど、とことはに、世の中のどのどと治りたりしなりとか。彼の道の直ちに違はせ給はぬと申すも、御父母を始め奉り、御兄君にも、いつくしみかしこまりの御心深くて、先々のみかどの御徳忘れさせ給はず、御後のわざどもいつくしうせさせ給へれどなり。されど、世こぞりて、御行ひのいみじきを、かぎりなき御光とあふぎたふとみもて

ゆきて、天の下こよなう平かなりしなり。

親につかへて志のいみじき人は、宮仕にもまめまめしく、又巳より年過したる人には、殊に實の兄のやうにさへ從ひかしこまりぬるものになん。さて家ならんには、家々睦しく整ひ、司々にも、禮節作法つゆ違ふことなくて、行の麗しければ、自ら人にあなづりろうぜられず、なからん末々までも、よき人の本にもなりぬるものぞよ。

もとより、人はほど／＼につけて、はかなき家の事とりしたゝめんにも、又國郡の事ことわらんにも、禮節の道にはなれたらんには、家も用もみたるべきなり。

なにがし又問ひ參らするやう、巳今萬の行ひのなべて此の孝の道よりおこり侍りぬるよしは、委しう承りつゝけ侍りて、孝とは親に從ひ事ふることぞと思ふ給へれど、父母のいはん事は、何事にまれいなび侍らざらんが、猶孝の道には違ひ侍るまじきか。師のいらへ筋なき事ないひぞよ。父母のおほせなりとて、なぞてかまさなきまゝには、折したがひぬべからんひがごとならんには、諫めこしらへ、一度にて思ひとゞまらざらんに、猶けしきを計らひて、いくたびも／＼おさへとゞむるこそ孝の道とはいひぬれ。さるを、あしき道ぞと知りて、さながらに、その方にさしいるゝやうやはある。いにしへ、御ふるまひのよからぬみかどにも、時の大臣に、いみじうかしこき人はねをならべて物し給ひ、物申すの司さへ、類ひなきが備はりたりしには、天の下動きなかりしも、よからぬ事はきびしう諫め申しゝが故なり。かゝらましかば、ほど／＼いみじき騷ぎもやがて出こましを、句受領なぞすぎ／＼よろしきほどの身に

も、よき家司心きゝたる從者どもの、心合せてたすけぬるは、その家亂れざりしなり。かへす〴〵も、よからぬとしる〳〵、いかでつれなく打過してはあらん。

されど、よき人の、君に仕へ奉るには、おまへに在りては、御政の筋、心の及ばんかぎり聞え奉りとり行ひ、猶下にをり家に在りても、常に君の御德のかしこからん事を思ひはかりて、世の聞えのよからんは、御前にゆづり奉り、又あやまりおはしまさんには、おのが身におはせつゝ、そしられおはせざらんやう、よき道にすゝめ奉るをもて、君に仕ふる道とはいへりしなり。

さて、かういひつゞけたらんやうに、よく親につかへてん人は、父母におくれたらん折のかなしともかなしきには、人目をもえつゝみあへず、聲をはなちて泣きまどひ、物にあたり足ずりのみせられつゝ、かたちづくろひなどは心にもつかず、來とぶらふ人々にいらへ打ちするも、始終のはの〴〵しうまして、やすきいもねず、きぬのうつくしきも目につかず、物くへどうまくもあらず、影のやうにくづほれて、さながら消えも入りなんやうなるころ、げにさもありぬべき事と、見る目も人聞もこよなくなん。やがて作法のやうに、わざともなしはて、さて倚廬に籠り居ること、いとまの日數も、服のかぎりも、公のさだめはあれど、それはてなん後も、猶心にばかりは、いつとなう打忍びつゝ、さて六とせや七とせと、幾歲を經る迄も、其の時に至りては、ありしのやうにねんごろにあととひてつかへぬるなり。なき人の數に入りなん後も、猶いけらん折のやうに、始終たかはざらんを、いみじき孝子とこそはいひ

つべけれどあり。このくだりの事ども、かしこき文にしるしたりしを、今は幼にさとし易からんやうにと、かうかんなにかいつゞけたんなる事の心だに違ひなからんには、罪うるわざもあらじと、いひざまのせう〳〵かはれるも、又ことさらにくだ〳〵しう打添へたる處もあり、ひが心のさかしらを、いかにぞとは思ふ物から、孝の道の一筋は、いみじうかしこまりてなん。かきとりたる人わらべなるしわざながら、ひじりのせちにをしへいましめ給ひける事どもは、かまへてゆめおろかにな思ひぞよ。（をはり）

またぬ青葉（つゞき）

故人　香川景樹

十五日。

十六日。詣で見れど、あをやかなる竹のはな筒のちひさからぬに、花の千種いろ〳〵さしこめて、其の枝に結べる歌、

　今日ありて明日なき花の手向草
　　いづれ枯葉となるの身なれど

又其の筒を削りて、山田何がしとかけれど、なほ知らぬ人なり。いづくの誰ならん。さりともゆかりなき人來りて、やは手向くべき、如何にと打傾きて、年の運などやう〳〵思出れど、三十年の其のかみ、我が故郷の國にして、いと親しく交りし山田よしかねなりけり。おのれ都へ上りて後、其の跡慕來て、やがて又かげろふの行方さへ知らざりしに、猶都の中に、とぞかりあるかなきかに聞きつるが此のごろの世を悲しと聞きて、なきかげをだにとひつらん。遠きいなどの山松の、いと若かりしむかしあそびも、千歳を經ぬる心地して、さま〳〵なりし幻の世中、

今はたひとつに浮出て、例のたゞずめり。

　なき人はいよ〳〵遠き國に在りて
　　如何に昔を思出づらん

十七日。今日は三十五日なり。詣うでたるに、蟬の聲はのかに聞ゆ。思ひ出づる事多し。

　人は今如何なる空に身をかへて
　　うつせみの世を忘れ果てけん

又しきみをりかけし水をけの前に、一ひらの歌あり。

　手向する水にうつろふ我が影は
　　よになき母のかたみなりけり

とぞかける。こは此わした女たか子が詣で來て我にも見よと手向けつらん。あはれに覺江て打吟ずるを、此の御寺に、年ふりて老ぼけたる男の、傍に草取居るが、やをら差覗きて、實にやさなり。さぞ〳〵覺すらんとぞ呻きたる。そのかはつきには似ざりけり。

これにぞ思出づる、二月十五日の朝なりけん、同じ孝子が許より、

　よべも、寢られず侍りしが、うつ〳〵とまどろみける際、母君と花見にまかりける夢を見侍りて、

　　たらちねと共に慰む花見こそ
　　　さめて果敢なき夢にはありけれ

といひれてしたる其日しも、殊に弱りてたのもしげなきを、唯さるかたにかはらずそのみいひつかはしてよめる、

　夢の中の花の姿や誰ならん
　　實の人は見る影もなし

今は其の影もいづちいにけん。かくあやしうかきとめけるも、なほ悲哀のみだりわざにて、女々しういまはしき心地もすれど、又後見ん子どものかたみともなりなんやと、ねしもやりすてずなん。

文政三とせ神月の末の頃、引籠らひ居りし三十日餘の事ども、もの〻はし〴〵にしるしおきけるを、おのれだにえよみうまじうかいみだしたれど、今取出て姪なる庫子にうつし清めさせたるも、いとゞしどけなしや。

長門介景樹　（終）

人妻六德諺解

さきに編者が、この篇の作者を松平忠國とせしは誤りにて。赤堀又次郎ぬしより、左の如く申し送られたり、編者がひがことを傳へし罪いと深し、讀者幸に宥してよ。

人妻六德諺解を第百二十四號に、松平忠國の著作なるよし記されたれど然らず、此の書は朱雀忠國の作なり、忠國は通稱を賴母といひ、藤堂の重臣にして、元祿、享保頃の人なり、和漢の學に達し、著述多し、其の中余が聞き及べるものは、大學私解一冊、論語私解數冊、數目便覽六冊、五常手述歌、等なり、仝し號に載せられたる「世の中は」も其の作なるべし、又諺解の奥書に朋道とみえたるは余が高祖父にて、遜跡子とあるは朋道の別號なり、右正誤の爲更に記して編者のものによす。

赤堀又次郎

恭謹

とは、禮義たゞしくつゝしむ事なり。しうと、しうとめ、夫になれしたしむに過ぎて、あなどりじだらくにいたる事あるべきかと、常に心をかけて恐れ謹みて、禮義を亂すべからず。妻たるもの、夫を敬ひ謹みて、禮義正しければ、めしつかひ、すゑ〴〵まで、皆これに習ひて、其の家治るなり。なれあなどりて禮義みだりなれど、家人も子孫も

又これにならひて、必わざはひ出來るなり。年月をかさね、もろしらがに至るまで、禮義の正しからん事、片時も忘るべからず。

勤勞

とは、常に我が務むべき事にをこたらぬ事なり。遊び事にのみ心うつりて、糸針の事には、はやくたいくつし、徒らに月日をくらせを、其の身の道に背くのみにあらず、めしつかひまで皆これにならひ子をもちては、子どもこれにならひ、家おとろへ、用たらず。貴きも賤しきも、その身〳〵の務むべき事に心を入れて怠らざれは、家人にいひつくる事もはかゆき、子供もこれにならひて、家さかえ、おのづから、遊び事、えよう事にうつるひまなきによりて、悪しき道にもおちいらぬなり。務といふ一字は、一生のはかりごとこれにあるとなり。

右この六の徳は、人の妻たるもの丶、わきまへて、心にかけてたしなむべき事を、古の人えらびたまへるものなり。此の内ひとつを缺ぎても、人の妻たる道にあらず。かやうの道理を缺きたるものを、よそごとのやうに見る時は、朝夕見るとても、身の爲にはならず、すなはち、今日たゞいまの心に引きうけて、悪しきをあらため、善きにうつるべし。是みなむつかしく、およひ難き事にあらず、いかにも心やすく、なりやすく、もちひやすき事なり。

又この六徳のうちにて、柔順ならずして心たけく、夫に従はず。清潔ならずして物をむさぼり、他人に心をかけ、他人に慕はれんことをもとめて、その色めをかくしつゝみ、人の見とがめんことをおそれ。不妒ならずしてわけくれ心意をあかしても、夫は我

が心まゝにならぬを恨みかこち、いかりはらだて。儉節ならずして有るが上にも物ほしく、かなたに費えはけれど、こなたに事足らず。恭謙ならずして驕姑夫を馴れあなどれど、はづかしめられて、口をしきめを見。勤勞をいとひて徒らに月日を送り、つひに身のおき所なきは、一生身も心も安からぬ苦しきめを見て、あさましき事になりはつべし。されど、此の六德のなりやすく心やすく、心ひろく身も豐なる道をゆかど、命もながく、子孫も繁昌すべし。

（をはり）

女房三十六人歌合

藤井行麿寄贈

古き繪色紙より女三十六人歌合といふを見出つれど、とりいでゝ、おくりまゐらすになん。群書類聚の門にもをさめたりしかとも覺ゆ。

左　小野小町

色見えて移ろふものは世のなかの
ひとのこゝろの花にぞ有りける

右　式子内親王

ながむれど衣手すゞしひさかたの
あまのかはらのあきのはつ風

左　伊勢

おもひ川絶えずながるゝ水の泡の
うたかた人に逢へは消えめや

右　宮内卿

かきくらし猶ふるさとの雪のうちに
跡こそ見えねはるは來にけり

左　中務

秋風のふくにつけてもとはぬかな

をぎの葉ならは音はしてまし

右　周防内侍

契しにあはぬつらさも逢ふことの
なきにはえこそ限らざりけれ

左　齋宮女御

袖にさへ秋のゆふべはしぐれけり
消えしあさぢの露をわけつゝ

右　俊成卿女

下もえにおもひ消えなん煙だに
跡なき雲のはてぞかなしき

左　右近

おほかたの秋の空だにかなしきに
物おもひそふきのふけふかな

右　待賢門院堀川

雪ふかきいはのかけみち跡たゆる
よしのゝ里にはるはきにけり

左　右大將道綱女

吹風につけてもとはんさゝかにの
かよひし道はそらにたゆとも

右　宜秋門院丹後

忘られ難波の秋のよはのうら
こと浦にすむつきは見るとも

左　馬内侍

ほとゝぎすしのぶるものを柏木の
もりても聲のきこえぬるかな

右　加陽門院越前

沖つかぜよさむになるか田子の浦
海士のもしほ火たき増るらん

左　赤染衛門

かんなづき有明の空のしぐるゝを

またわれならぬ人や見るらん
右　二條院讃岐

世にふるは苦しきものを槙のやに
やすくもすぐるむら時雨かな
左　和泉式部

ものおもふさはの螢もわが身より
あくがれ出る玉かとぞ見る
右　小侍従

いかなれどその神山のあふひぐさ
としはふれども二葉なるらん
左　女藏人左近

七夕にかしつとおもひし逢ふことを
そのよなき名の立にけるかな
右　後鳥羽院下野

あふ人にとへど變らぬなじ名の
いくかになりぬむさしのゝ原
左　紫式部

みよしのゝ春のけしきに霞めども
むすばほれたるゆきの下草
右　辨内侍

小山田にまかざる水のあさみどり
そではひつらめ早苗とるまで
左　小式部

おもひ出で誰をか人のたずねまし
うきに絶えだる命ならねど
右　少將内侍

しらせばやとはかり物を思ふこそ
ならはぬ戀のはじめなりけれ
左　伊勢大輔

いにしへのならの都の八重さくら

けふ九重ににほひぬるかな

右　殷富門院大輔

命ありて逢ひ見んこともさだめなく
思ひしはるになりにけるかな

左　土御門院小宰相

はるはおは霞にこめてふかきよの
あはれを見する月のかけかな

右　清少納言

夜をこめて鳥の空音ははかるゝも
世にあふ坂のせきはゆるさじ

左　大貳三位

遙なるもろこしまてもゆくものは
秋のねさめのこゝろなりけり

右　八條院高倉

我がやとはをくらの山の近ければ

うき世をしかとなかぬ日はなき

左　高内侍

暁のつゆはまくらにおきけるを
草葉の上となにおもひけん

右　後嵯峨院中納言典侍

人にのみつらさは見へて吹く風の
こゝろにかなふやま櫻かな

左　一宮紀伊

おく露もしづこゝろなく秋風に
亂れて咲けるまのゝをきはら

右　式乾門院御匣

おなし世にたのむ契のむなしさは
うきみもかへてあふ事もかな

左　相摸

見わたせは浪のしからみかけてけり

右

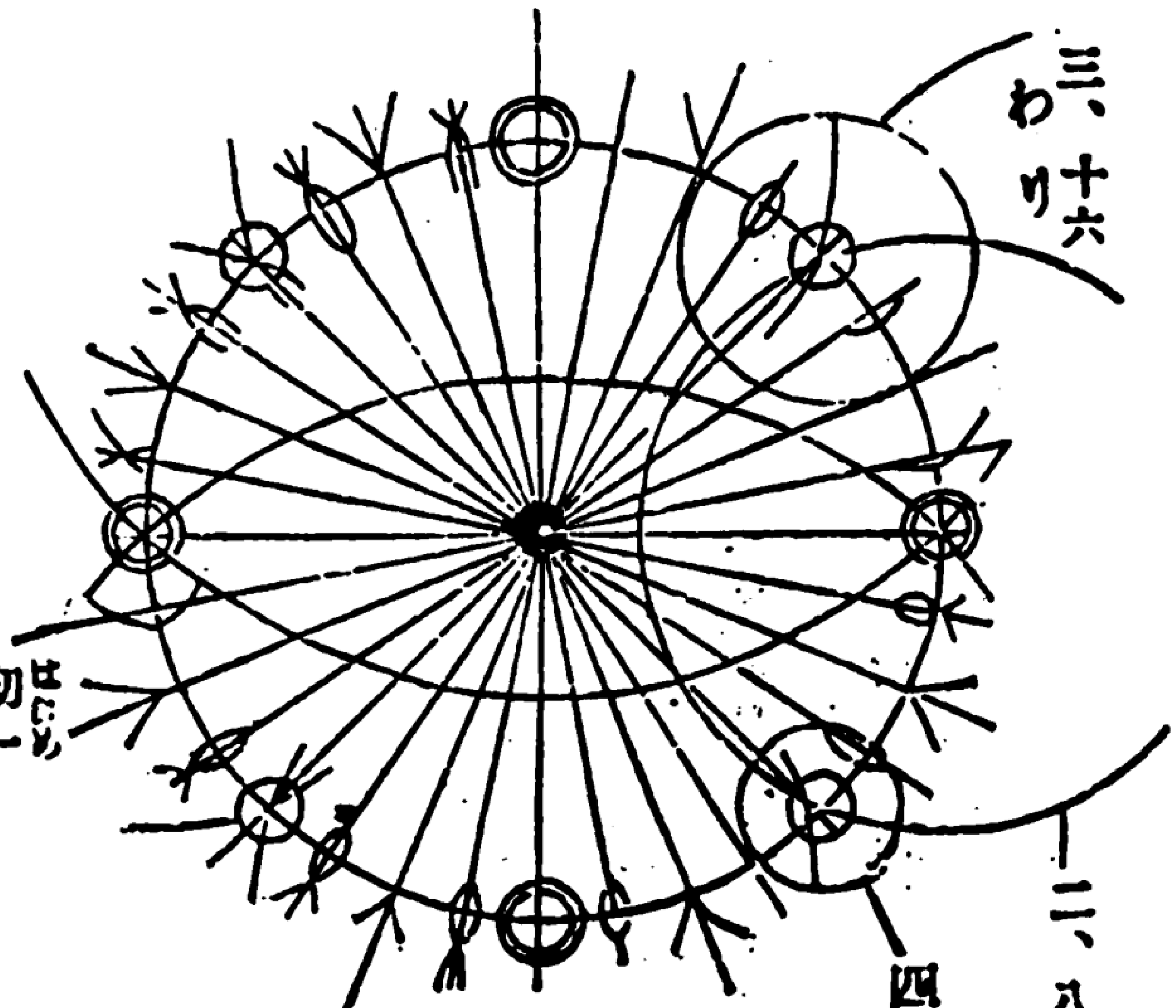
卯の花さけるたまかはのさと　藻壁門院　少將

それをだにこゝろのまゝの命とて

安くもこひに身をやかへてん

紋帳圖式綱目　井上頼文寄贈

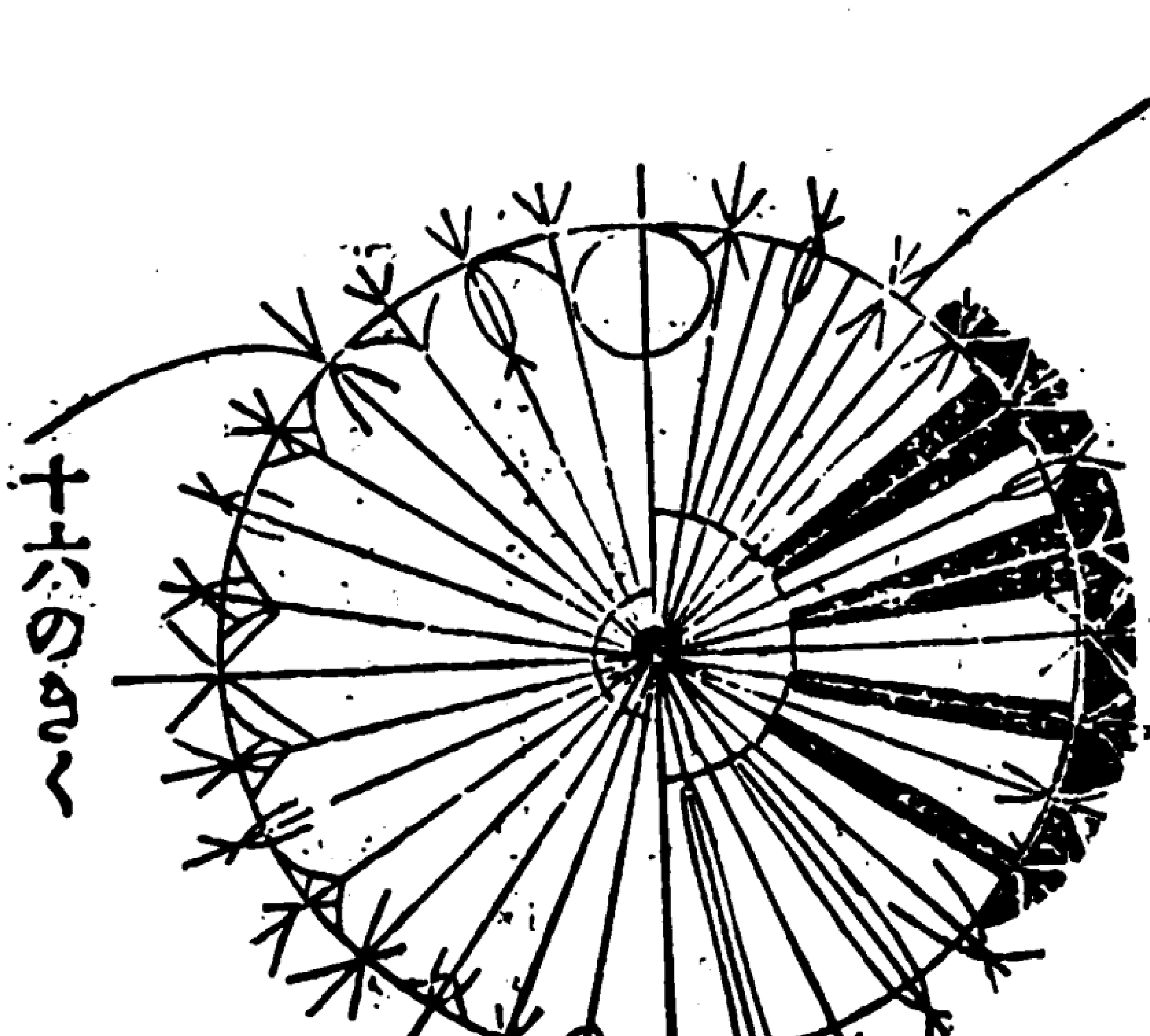
十六の物但三十二の割

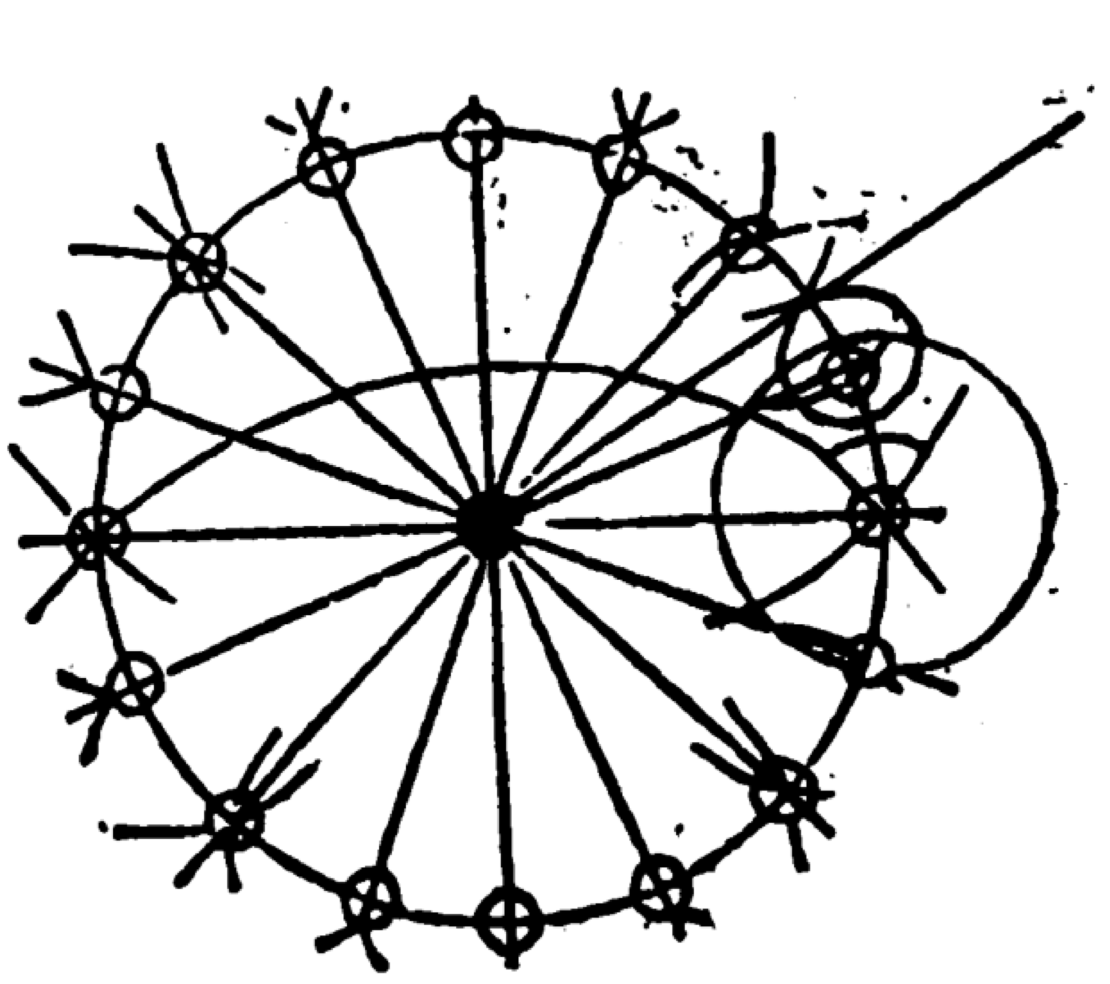


右割り方圖の如く用ゆ

但し前に記す通り八つ物（十六の割）のあひだを両方よりかけ割なり

但割方如此





雨月物語（つゞき）

故人　上田秋成

呆れて足の踏所さへ失れたるやうなりしが、熟れもふに、妻は既に死て、今は狐狸の住かはりて、かくのらなる宿となりたれど、怪しき鬼の化して、ありし形を見せつるにてぞあるべき。若又我を慕ふ魂のかへり來りてかたりぬるものか。思ひし事の露たがはざりしよと、更に涙さへ出ず、我身ひとつは故の身にしてとあゆみ廻るに、むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積て壠とし、雨露をふせぐまうけもあり、夜の靈はこゝもとよりやと恐しくも、且つなつかし。水向の具物せし中に、木の端を削りたるに、那須野紙のいたう古びて、文字もむら消ゑして所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも、年月もしるさで。三十一字に末期の心を花にも展たり。

さりともと思ふ心にはかられて
　世にもけふまでいきる命か

こゝにはじめて妻の死たるを覺りて、大に叫びて倒れ伏す。去とて何の年何の月日に終りしさへ知らぬ淺ましさよ、人は知りもやせんと、涙をとゞめて立出れど、日高くさし昇りぬ。先ちかき家に行て主を見るに、昔見し人にあらず。かへりて、何國の人ぞと咎む。勝四郎禮まひていふ、此隣なる家の主なりしが、過活のため京に七とせまでありて、昨の夜歸りまゐりしに、既に荒廢て人も住ゐ侍らず、妻なるものも死しと見ゑて、壠の設も見ゑつるが、いつの年にともなきにまさりてこひしく侍り、知らせ給はゞ教給へかし。主の男いふ、哀にも聞ゑ給ふものかな、我こゝに住もいまだ一とせばかりの事なれど、

それよりはるかの昔に亡給ふと見えて、住給ふ人のありつる世は知り侍らず、すべて此の里の舊き人は兵亂の初に逃失て、今住居する人は大かた他より移り來たる人なり、唯一人の翁の侍るが、所に舊しき人と見え給ふ、時〱あの家にゆきて、亡給ふ人の菩提を弔はせ給ふなり、此翁こそ月日をもしらせ給ふべしといふ。勝四郎いふ、さては其の翁の栖給ふ家は何方にて侍るや。主いふ、こゝより百歩はかり濱の方に、麻おほく種たる畑の主にて、其所にちひさき庵して住せ給ふなりと教ふ。勝四郎よろこびてかの家にゆきて見れば、七十許の翁の、腰は淺ましきまで屈りたるが、庭竈の前に圓座敷て茶を啜り居る。翁も勝四郎と見るより、吾主何とて遲く歸り給ふといふを見れば、此の里に久しき漆間の翁といふ人なり。勝四郎、翁が高齢をことぶきて、次に京に行き心ならずも逗りしより、前夜のあやしきまでを詳にかたりて、翁が壠を築て祭り給ふ恩のかたじけなきを告つゝも涙とゞめがたし。翁いふ、吾主遠くゆき給ひて後は、夏の頃より干戈を揮ひ出て、里人は所々に遁れ、若き者どもは軍民に召るゝほどに、桑田にはかに狐兎の叢となる、只烈婦のみ主が秋を約ひ給ふを守りて、家を出給はず、翁も又足蹇て百歩を難しとすれば、深く閉こもりて出ず、一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。秋去春來りて、其の年の八月十日といふに死給ふ。惆しさのあまりに、老が手づから土を運びて柩を藏め、其の終焉に殘し給ひし筆の跡を壠のしるしとて蘋蘩行潦の祭りも心ばかりにものしけるが、翁もとより筆とる事をしもしらねば、其の月日

を紀す事もしらせず。寺院遠ければ贈號を求むる方もなくて、五とせを過し侍るなり。今の物がたりを聞に、必烈婦の魂の來り給ひて、舊しき恨みを聞え給ふなるべし、復びかしこに行て念頃にとふらひ給へとて、杖を曳て前に立ち、相ともに壠のまへに俯して聲を放て歎きつゝも、其の夜はそこに念佛して明しける。寢られぬまゝに翁かたりていふ、翁が祖父の其の祖父すらも生れぬはるかの徃古の事よ、此の郷に眞間の手兒女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ身には麻衣に青衿つけて、髪だも梳らず、履だも穿ずてあれど、面は望の夜の月の如く、笑む花の艶ふが如く、綾錦に裝める京女﨟にも勝りたれとて、この里人はもとより、京の防人等。國の隣の人までも、言をよせて戀慕ざるはなかりしぞ、手兒女物うき事に思ひ沈みつゝ、おほくの人の心に報ひすとて、此浦回の波に身を投しことを、世の哀なる例とて。いにしへの人は歌にもよみ給ひてかたり傳へしを、翁が稚かりしときに、母のおもしろく話り給ふをさへいと哀なることに聞きしを、此の亡人の心は、昔の手兒女が幼なき心にきらをかまさりて悲しかりけんと、かたる〳〵涙さしぐみてとゞめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりけり。勝四郎か悲しみはいふべくもなし、此の物がたりを聞きて、おもふあまりを田舍人の鈍くもよみける

いにしへの眞間の手兒奈をかくばかり
　戀てしあらん眞間のてこなを

思ふ心のはしばかりをもえいはぬぞ、よくいふ人の心にもまさりてあはれなりとやいはん。かの國にしば〳〵かよふ商人の聞傳へてかたりけるなりき。

東京廿四景　　蓬生屋女史

洲崎の辨天（十六）

隅田川の川尻にわたせる永代をうちすぎて、越中島を右に見て、五六丁たどりゆけば、海に接せる一帶の長堤、こゝは洲崎の辨天とて、景色いとよし。やしろは土手を下りたる處にありて、輪奐宏壯といふほどにはあらねど、流石にすが〳〵しき宮のさまたふとく、賽者つねに絶えぬさまなり。白波、堤下の巖をかみて、汚れ心地も洗はるゝ心地するに、白帆の影、七砲臺に隱見し、佃島のわたりに碇泊せる船舶の帆柱、林の如く立てど、房州通ひ、木更津通ひの蒸滊船の、烟吐きたるが、見る〳〵小さくなりゆきて、はては豆の如くなりて、波間に沒するも、いとをかし、左に近く洲崎の遊廓の見ゆるは、きづなれ



ど、右に見ゆる品川の遊廓、遠けれど、反つて燈光夜の景色を添へぬ。沖中の燈臺に羽田岬を認め、天邊の翠黛、鹿野鋸の山々相並びて、そゞろに遊子の心を牽く、數年前、遊廓此地にうつりて、いたく風景を俗了したれど、なほ近く深川八幡のやしろあり。堤上にも春は花をあがめて翠を拾ふべく、汐干の時節には、砲臺のあたりに數百艘の舟うけて、おりたちて貝拾ふさま、手に取る如く見ゆ、月のうね〳〵と千里の波にくだくる秋の夜景色は、げにさこそと思ひやられてなむ。

朝露（第百廿二號の續）

（其七）

柳　子

櫻　子

末の露、もとの雫や、よの中の、おくれさきだつ、はじめなるらん。げに果かなきは人の命、昨日は錦帳玉欄の許に榮花に誇りしたをやめも、今日は道の邊の草柴の露とだに、消えがてなる命を、一椀の飯につなぐあはれさ。扨も武雄は、母のあつき慈愛の看護と、人々の心づくしも水の泡となりて、廿一日の夕慈愛深き母の手をにぎり、左には亡父と妹の寫眞とを持ちしまゝ、桐の一葉のもろくも秋風にさき立ちぬ。

あはれ〳〵前途有望の一少年をして、無慘にもかく夭死せしめし天の心ぞ恨めしき、母の歎きはいはずもあれや、愛子は死去の報をきくと衣服もあらためず上京して、まづ柩にとりすがり、

兄さまッーにいさまなせしんだのにいさまーにいさまよー愛が参りましたからにいさまーなせ返事して下さらないの兄さま……………………

跡は泪に咽びて聲もきこえず……………………

越えて廿七日、厳なる柩は粛然として松非家の門を出でつ、會葬者には舊友を始めとして、知人みな、悄然して從ひ行けり。やがて青山墓地に埋葬し、松非海軍大尉の弔詞、同じく信夫の哀悼の詞、學校惣代の弔詞を始として、各舊友よりの供物は山の如し、此れを見ても武雄の平素の行狀を察するを得べし、會葬者は殘りをしげに一人行き二人去り三人歸りて、はや殘りなく人も見えずなりぬ。墓前にあるは。忠高夫婦、信夫、清子、愛子のみ、互に語らふ言葉、もなく、顔を見合すたび毎に出づるは只涙のみ。

かくて有るべきにあらねば、あまたたび墓前にぬかづかて、歸り行く門を出でんとする時、見返れば、只白木のみ物淋しげに松の木の下に立てり。あはれ芳野武雄。武雄はこの寂莫たる地下に眠り、松風孤梟の聲を友として、呼べども返らず。嗚呼。　（未完）

朴平（十四）

白魚女史

未だ都の空には春はたゝずやある。今年は新玉の便いとれそき事よな、文雄は何としつる、父君への禮儀忘れてか。さばかりの後見、そちも心づけられぬ事もあるまじきを。伯母御のれはせしよりの久しきゆかり、佛に對してもいと清く明るき身、ゆめ自ら暗くな思ひそ。返す〲わかるきそちぞよ。云はぬは云ふにまさる春をまちてんと思へばぞ、母はまだうちつけに音にも立てぬなり。今年か來年は次郎をも都へのぼせんつもり、必ず心強う思ひてよ、ふりて待ちてよ。朴平の事も、思へば、その心づかひのけしき、よそながらさこそと見らるゝやうにて、いたはしくもいとほし。また一つ年を加へてに、ちよんまげの雪、さばかりしるくなりまさりてならむ、

いたはしや、必ずいたはりてやれよ。そちが身は、もとより自ら、朴平をもいたはりて心強うよき日を待ちてよ。返す〲、くれ〲、百代よ、百代よ、母よりぞや。

とよむから、やさしき母の聲の耳にもきこえ、やさしき母の影の目にも見ゆるやうにて、朝夕さこそは御心一つに思ひかけ給ふ御心づかひの、目のあたりに思ひくまれて、かなしく勿躰なく、百代は書の面に、よゝと泣きしづみて、人心地も忘れんばかりなりけるが、やがて面をぬぐひ、

　　幾度か君が文をばくりかへし
　　　くりかへしてはぬるゝ袖かな

くりかへして誠に袖をもぬらし〱、父君への御禮、今年は文雄事、うき世の禮うるさし、そちよりよきやうにと兼ねて云ひつけられて候ひしを、何をかよき歌にてもよみての後になど、なまなるみやび心に思ひ凝り候ものからに、心ならずも此のきさらぎ近うまでおくれ侍りて、いたう御心をいため参らせし不孝、幾重にもゆるさせ給ひてよ。おくればせながら、父君にも、よろしうあらたまの御壽を聞え上げ置き遊ばしてよ。何れ文雄も春長にゆる〱御びわをと申し居りてに侍り、何事ものどかなる心の人にて

と、したゝむる文のおもてに、はら〱とこぼるゝ涙、墨のにじみたるにおどろきてひきさき、再び墨濃くすりそへて、したゝめ返すもあはれなり。何事も裏のうらなる身には書き終るまゝに、悲しき涙の、おとゝにこぼれ出でゝ止まらず。泣く〱またもなつかしさに母よりの文とり上ぐれば、なほ封の中にとり殘したる文あり、粗忽なる自らよと思ひ





ながら、披らき見れば、妹よりの文なり。

とことはにきて鳴く鳥　庭雀此の古里の軒にも昨日今日は何となく春めきて聞え候へば其處の都へは如何ばかりめづらしうながめられ給はんと此處ながら心ゆくやう覺え候〳〵やがて間もなく弟も都にのぼるよし今年姉上の居らせ給はぬに骨牌の席の何となうひきたゝぬやうに候ものを此の上弟にさへ行かれ候ては如何なる古里にかなり候はんと今より心細う侍りどうぞ〳〵古里人のせめてもの心やりに玉敷の都の樣子より〳〵きかせ給へかし

あなかしこ

千代ゟ

姉上樣

と何事も知らぬあどなき妹の都なつかしげなる文の言葉にもうちなかるゝ百代。

妾も去年の春は、都の春なつかしう、床かしうのみ思ひながめられて、人の誘ふにも何となう心地引きたゝで、籠りがちなりしが、なつかしき次郎や千代、共に袖つらねて取り興したる骨牌の席には、さすがに慰められて、面白かりし去年までの春、思ひ出せば、なつかしうあり〳〵と見ゆるむかしの春。まつをなぞくるしとは思ひけん、思ひしむかしの心の憎くさよ。妹、妾は今一度、そちの如き古里人とならまほし、都をばしたふ身にならまほしやと、またもくりかへさるゝ事々、

うらゝかなる春はかへれども、都には晴れぬながめのみ、そちたちが古里の空こそうらやましけれ。山里もはや二月、其處には谷川の氷りもうちとけてならんを、此處の涙のつらゝは結びまさるのみと、我

しらず半切れに書きちらせしが、あなや、たれろかやとひきさきて、

　何事もうらやみ給ひそ何處もれなじ春のあけぼのぞや

と、勢よくちらし書きしのみに封じて、つく〴〵とながむる庭の面、なき出さんやうの空。殿は何處にましますならんと、庭の彼方に聲たつる朴平。百代は何故にか俄に涙のみなぎりて、忍びかねたる泣く聲のればねずもるゝに、朴平早くもきゝつけてか、椽近う訪れて、嬢樣と云ひたるが、彼方も何故か涙になりて、仆れぬばかりに椽にとりつきて泣く。あな朴平何をなきてぞ。母樣の御文に、そちの頭の雪思ひ案じてなどありしにて、妾はふとかなしくなりてなり。そちはまた何がかなしうてか。自らはもはや外にかなしき事もあらじ。返す〴〵、自らが事など氣づかひて、泣きてなくれぞ。いつかはのどけき春ともならんにと、なぐさめ聞ゆる折りふし文雄の歸り、二人は急ぎ玄關に立ち迎ふれど、いつも〳〵、うるさしと云ひげに、面しはめて、濁江にも蓮の心の何處までも清きあれど、清き井の中にも、ぼうふらは住みてなりと獨り語ちつゝ、書齋の戸あら〳〵しく引き立てゝまた出でも來ず。



文林

霧中山　　近衛忠熙

足びきの山ぢわけゆくたびころも
ひも夕ぐれになるかわひしき

寒夜衾　　鍋島直大

まろねする人いかならん厚ふすま
着てすら寒きふゆの夜すがら

山家梅　　佐々木高行

ぬしゑらぬ片山はたのうめのはな
おのづからなる香こそ匂へれ

森鶯　　津輕承昭

梅そのをけさは離れてうぐひすの
こゑこそ匂へしらびげのもり

雪中鶯聲　　壬生基修

こゑとけてなく鶯のつださには
かゝれと消ゆる春のあはゆき

里鶯　　前田利鬯

きのふけふつゑひく人の見ゆる哉
うぐひすきなくかなすきの里

雪中祝　　長谷信成

ふる雪に松のあらしもゑづまりて
枝をならさぬ世をいはふかな

江上霞　　宮地巖夫

みしま江の玉江にたてる玉やなぎ
かつもゑそめてかすみたな引

寒松　小出粲

はひかゝる蔦のもみぢも散はてゝ
松のはしろく霜ふりにけり

山影寫水　内藤存守

とこしへに動かぬ山もうつきけり
流るゝみづにかげをうつして

鐵屋鶴女　佐々豊水

くろがねのかたくたゞしき眞心は
鶴の八千代のかゞみなりけり

無常　安齋篤敬

かげろふの有か無かの身にしあれど
よの行くすゑをなに思ふべき

親しき友のはかなくなれるとき　松本操

ゆめなれや現とみれどほのぐらき
火影のすゑにきみがれもかけ

漁村　伊東祐賢

夕なぎに檝のひさみてこぎくるは
わひきさちあるあま小舟かな

君恩如山　宇井正夫

仰ぎ見る雲井にたかきふじの嶺に
まさるは君のめぐみなりけり

霞添山色　蜂須賀隨子

春がすみたち初しよりやまのはの
ゆきも花かとうたがはれぬる

朝鶯　鍋島榮子

吹く風の寒さわしたもれてたらず
なくうぐひすの聲ぞきこゆる

早春雪　前田朗子

春きぬとほころびそめし梅か枝に
はなをそへてもかゝる雪かな

春鶯呼客　日野西厳子

ねしらぬ庵をもけふはとひてけり
鳴くうぐひすの聲をしるべに

若菜少　保科節子

雪まぜの風みにしみてはるながら
もゆる若菜のかずぞすくなき

隣家梅　松平健子

かいまみもゆるさぬ物を垣こしに
うらやましくもにほふ梅かな

早春柳　南郷柳子

はるの日もまだなかゝらぬいと柳
みどりの色にやゝなりにけり

霞中梅　中牟田常子

立わくるかすみの奥にうめぞやし
ありとしられて風かをるなり

浦邊霞　鶴久子

うら／＼と空も一つにかすむ日は
沖のしら帆のかげもうごかす

春雪散風　中島歌子

吹く風のいつまでさゆる春ならん
ゆきの花さへけさはちりつゝ

雪中梅　内田遊歌子

香くはしきこの一枝やそれならむ
木ごとに雪の花と見ゆれど

人の富士の歌よみたるを　久後すゝ子

雪のみと思ひしふじのたかねにも
君がことぞのはなや咲くらん

初春雪　清水きく子

櫻木にふりくるゆきはなにとなく
　春のいろにも見ゑわたるかな

三日間の初旅　師岡須賀子

校長の、切なるたのみ言と、舊き師の君たちの懇なる、すゝめとによりて、一月のはじめつ方ばかり、越路の空さして、只一人、出でたちつ。年の初の都のけしきと、二十年あまりの年月を、たゞ側をもはなれまつらざる、母君のみもと、又親しき妹、さては、十年このかた馴れにし學校、其の他敎子たちとに、いま別れなんこと言ひ知らず、悲しくつらき事なるを、さまぐ\に念じつゝ、急ぎ彼方此方の、用引きしたゝめ、品川より、一番の汽車に、のらんとて、數多の人々に、送られて、立ち出づ。母の君、夜中はかりより、起き出で給ひて、種々心つかひし給ふ、何時ながら、恭さ限りなく、此の程よりのまぎれに、いかばかりかつかれ給ひつらん、思ふに、彼は斯くして、此は何してと、道すがらより、行きつかん先のことまでも、殘るくまなき、心遣ひに、いよゝ都の別れ、うしろめたし。車つらねて、行く程も、母君の御心な煩し奉りろ、家の事よく心して、あやまつな。遠く出でませる父の君の、御安否怠らず訪らひまつれ、猶、かの事、この事、な怠りぞ。と操返しつゝ、妹に敎へ語ふこと、つきせず。かくて品川につく。此處より人々と別るゝに、いと名殘をし、彼方にも、汽車の音のきこゑん限り、立ち居て別れ惜むめり。漸々明け行きて、國府津にて、皆別れぬ。今は只一人なり。いと淋しく、心細し。幼くてより、生れし國を出でにし人、又は、旅に馴れた

らん人は、さるものながら、只父母の側さらず、何處にも、一人しては、出たちしこともなき身の、思へぞ、三百五十哩余りの初旅、如何に〳〵と、行先のみぞ、思はるゝ。少し打くもりたる空、漸くかきくらしつゝ、箱根の山々過ぎ行くほどに、いと寒くなりぬ。愛度しと、聞きし、御殿場わたりも、いとくもりて、かの雲より高き、富士の山も、よく見ねず、いつしか雨となりぬ、いと口をし、あな、心なの雲よ、あな、いふせき雨よ、と、ひとり打ちかこつほどに、沼津わたりより、雨はれ、日影さし出でたり。いとうれし。富士川の、鐵橋わたりより、心地あしくて、よくはしらず。その夕つ方、名古屋停車場につきて、こゝにて汽車を下る。初旅の、つかれたる心地の堪へがたけれぞなり。此處は、三都に亞ぐ、繁榮の地と、聞くからにや、車夫どものあしきたくみする事甚し。東熱田古澤村なる、角田の叔父の君たづねて、夜になりて着きぬ。叔父の君、こは珍しとて、喜び給ひて、さま〴〵に、もてなし給ふに、嬉しきこと限りなし。何くれの事、語り合ひて、かたみにつきせず。冬の夜ながら、今宵は明やすかりき、と思ふも心からなりや。此の地いと暖にて、梅は旣に匂ひて、木草のさま、垣根にもるゝ鶯など、春のけしき、ならぬはなかりき。朝飯終へて、叔父の君案内し給ひて、仕へ奉れる、熱田神宮、拜みにと出で立つ。女子たち四人打ちつれたり。途すがら、宮簀媛の御墓、あるは、木曾の三國峠、美濃の養老山、など、滿白に雲ふりつもれり、遠くも來にける哉と、業平の君ならねど、珍しくも、あはれにも、淋しくも、樣々に思ひ出られて、いとゞ都のみ戀しきや。

木立ものふりて、いとゞ神さびたる森を指して、あれこそ、神宮の御山よ、など云はるゝに、嬉しくて、西の方より、行くほど、數多の燈籠あり。舊御師とかの奉れりしものとか。信長公の、築かれたる、土塀、清正公の樓門、なほ依然たり。手足滌め、衣あらためて宮居拜みまつる。祈りまつるは、只何事も恙なかれ、とのみ「いのるぞよ我が思ふことなるみ潟」とよみ「雨風も神の心にまかすらん」と詠じて奉れる、阿佛尼の心、思ひやらる。俊基の朝臣の、拜みましけん折、織田の右大臣の、勝戰を祈り給ひけんをり、如何ばかりなりけん、などたゞ當時の心地す。宮居は、近き年改めつくらせ給ひて、神宮と、申し奉るからに、總て、伊勢にならひ、御本殿は、内宮の如く、御外殿は、外宮の如く、少しも、かはること、なしとぞ。天そゝる雲の宮居に、朝日かげさし出てゝ、輝きあへる尊しといふもかしこしや。右の方に瑞籬御門、齋宮殿、あり。こは、伊勢の齋宮、こゝにましませしなりとぞ。勅使の立所宮中大嘗會の御殿、舊賢所の御殿、いとかしこしや。舊御殿とて、左の方にあり。こは、近き代の建築なれど、廻廊、其の他、鎌倉の八幡宮に似たり。其が前なる、大木の椎あり。下より、一丈ばかりが程は、枝なくて、切りたるあと、所々にあるを、指して、こは、先つ年　主上御參拜のみぎり、この木かげにて、御手水まゐらせ給へりしに、小枝の、大御衣にさはりもやするとて、切らせたるなり。其の折は、未だいと低く、ちひさき木なりけんをと、言はるゝに、甚じくも、繁れるもの哉。さる御ゆかり有るからに、忝く嬉しとて、いよゝ育ちに育ち、さかゐに榮ゐたるらめ。斯る木こそは、注連引きはへ、柵うちて

守らせたけれなど、語り合ひつゝ、なほ佐久間の石燈籠、學問所、何やかや、見て、さて車いそかせて、名古屋に至る。

昨夜は、暗くて何處とも分かれざりしかど、今日は暖にて、日いと長閑なれど、いと心地よくて、彼方此方、見もて行くに、熱田本町わたりにやありけん、果物うる店ありけり。此のわたりにては極めて、小さくはあらぬ家ながら、其が價をしるせるに、圓き輪を、或は二ッ、或は三つ、或は五つ六つ七つ、など書きてあり。如何なる故ぞと問ふに、錢の數、幾個々々といふことなり。未た文字にては、讀み得ぬものもあめれど斯くはするなりとぞ。名古屋紡績場、三井製糸所等、の烟、遠近に、たなびきて、ときの知らせの鐘鳴るさま、都の三田の事も、又思ひ出られぬ。車の進み行く程、漸く賑はしさも、添ひて、年の始の、松飾注連などの、未だ殘れるも、珍らし。大通にいたれど、右には縣廳、其他、學校等高くたち、左には、名古屋ほてる、新しく建ちて、共に、いと宏壯なり。兩側には、樹を植ゑて、道幅廣きさま、東京なる銀座通の如し。西河岸對月樓にて、晝飯終へて、一時五十五分、名古屋發の汽車に、乘らんとて、停車場に至る。しばし待つ程、かの名に高き名古屋城遙に見ゆ。御空に高き鯱、日影に、光りそひたり。今は離宮とさへ、定め給へりと、きくからに、いと尊しかし。こゝより叔父の君にも、はた孃たちにも、立ち別るべけれど、又もや、只一人とならんかと、いと心細きこと、かぎりなし。叔父の君、書物よ、新聞よ、と何くれ、心つけ給ふに、紛るゝほど、知り給ふ人の、家族をつれて、京都へと行くといふに遇ひぬ。幸なりとて、此の人々と共に、乘り

ねとて、懇に頼み給ふ。嬉しともうれしきは、この時の心なり。かくて、別れまつりて、此の人々と共に、米原といふにつきて、宿る。旅寢の夜半、いかて、夢をも結ふべき。終夜露目とろまれず。

あくる日は、此の人々等に別れて、米原より、福井へとて、五時三十八分の汽車に乗る。長濱、木の本、など云ひて、停車すれど、未た暗くして露見えず。中の郷、すぐる頃、漸く白み行くと共に、両側の山々にはだらに殘れる雪、いと寒げなり。かくて、我か行かんとする福井市までは、十余の停車場をすぎずては、と思へど、北へ北へと行くにつけて、愈寒けく、雪さへ、如何に、深からん、いかで今年ぞかりだに暖かなれかし、棲みなれず、弱くのみある、此の身。はた、知れる人も、未た多からねぞなど、心に祈りつゝ、柳ケ瀬、疋田、打ちすぎて敦賀の停車場に至る。七時二十六分となれど、夜は全く明けて、四方の山々、雪見ゆるに、先づいと尊きは、氣比の神宮なり、車を下りて、拜みまつらんとするに、金ケ崎ならでは、停車せずと云へど、中より拜みまつる。此の御社は、先つ頃、御昇格ましまして、越前第一の神社なり。境内いと廣う、神さび給へり。金ケ崎をゆく道すがら、ふと目とまれるは、家々の屋根に、石又は縄打ちはへ、或は皆から縄もて結ひなどしたるなり。雪深きことは、これにても、知られつと、車の中の人々の、云はるゝに、いよ〳〵、行く先心細し。敦賀と聞けど、神功皇后の事、偲びまつられ、金ケ崎と云へど、新田左中將のこと、はた春宮をはじめまつり、成良親王、其の他、只、今更にかなしくなん。此處は、北海の要港とて、船舶の出入繁く、賑ひたり。汽車又、敦賀に戻り、新設師

圍をこの地に定められたれど、愈賑はゝしからん、など、人皆いひあへり。繩、又は竹、藁、などにて屋根を蔽へるさま、何處も仝し。此のわたり、去年の洪水のあと、哀に墓なきさま、たとへん方なし。此よりは、只、山又山、川又川、なれど隧道いと多く、汽笛をきゝては、窓をとざすこと、幾度なるを知らず。閉ぢぬれども、煙車の内にみち〳〵て、心地あしゝ。世の中の行路難、皆かくの如しなど、云ひ〳〵て、人々の慰み合ふに、いとゝ一人の初旅恐ろしくなん。今庄、鯖江、武生、大土呂打ち過ぎて、此處こそは、我が志す福井なれと思へは嬉しともうれしく、急行列車の進みさへ、なほ遲き心地す。山又山、畑又畑、いともどかしや。漸々人家多く見ゆるに、人々の、荷物したゝめ、身づくろひなどするに、近づきぬとは知られたり。午前十時二十四分と云ふに、福井停車場に着く。車走らせて、電信局に至りて、東京其の他へと電報を發し、師範學校、及高等女學校にいたりて、到着の事を、聞ゑて、さて、知人の家に入れり。思へは三百五十三哩の初旅、二三日ぞかりなり。古ならましかど、いかで只女一人と覺ゆるに、嬉しきは學術の進歩、めでたきは明治の大御代なりけり。此の地雪ふらず、おもひしにまして暖にて、煩なし。なほ見聞きつることゝもはあれど、あとよりとてなん。

昨日までよそに聞きつる三越路の
福井の里に我は來にけり

明治三十年一月のはじめ、福井縣高等女學校にて



大喪雜記

○御陵　皇太后陛下の御陵は、京都市下京區今熊野町字月輪山。と、定められたる旨、さる月二十三日仰出されたり。

○大喪費　この度の大喪費に付ては、至極重大なることゝて、其の筋に於ても鄭重に調査中なるよし兼て承りしが、いよいよ七十萬圓と確定し、議會の協賛を經てさる月廿四日公布せられたり。

○御葬送御發着日割　皇太后陛下御葬送御發着日割は去る月二十五日、左の通り定められたり。

二月二日正午十二時　青山御所御出門
　　　　　　　　　　青山假停車塲着御
　　　　　　　　　　汽車乘御
　午后二時　　　　　御發車
二月三日午前八時三十五分　京都停車塲着御
　　　　　　　　　　同御所御發輦
　午前九時三十分　　大宮御所着御
二月七日午後六時　　大宮御所御出門
　　　　　　　　　　月輪山御齋塲着御
　午後十一時　　　　御齋塲式
二月八日午前四時　　御陵所へ移御
　　　　　　　　　　御埋葬

○喪服の決定　御喪主有栖川宮殿下を始め奉り、大喪使次官事務官に至るまで、大禮服を着用せしめらるゝか、將た特に喪服を着用せしめらるゝかは、

日來の一疑問なりしか、遂に孰れも喪服を着用せしめらるゝことに決定したり、今其あらましを承るに左の如し。

喪主殿下　冠卷纓　袍黒橡色布　單鈍色布　袴黒橡色布　素服　藁沓　杖　扇黒骨鈍色

皇太后宮大夫、亮、御輦脇華族　冠同上　袍同上　單同上　袴鈍色布　素服藁沓　杖　扉同上

大喪使次官、事務官、齋主、齋官、諸陵頭　冠以下同上　素服及杖なし

因に記す、素服は元來御喪主のみに限らせらるゝも、其大夫以下の着用するは、特賜に係る義なりと承はる。

○朝鮮の献品　朝鮮宮廷よりは、奉弔の爲め、銀の造花を献上する筈にて、弔慰大使李夏榮之を携帶して出發したりといふ。

○行幸啓御見合せ　天皇　皇后兩陛下には、皇太后陛下御葬送のせつ、京都へ行幸啓あらせらるゝ筈なりしも、此の程來御不例に渡らせらるゝを以て御見合と相成りたる旨、さる月二十六日官報を以て公布せられたり、全文は次の如し。

天皇　皇后兩陛下は、御風氣にあらせらるゝを以て、　皇太后陛下御葬送の節、京都へ行幸啓あらせられざることに御決定相成りたり。　兩陛下御容体左の如し。

天皇陛下は昨二十九年十二月三十日より御風氣

皇后陛下は、本月八日より御風氣にて、御假床にならせられたり。然るに　皇太后陛下御病中、青山御所へ押して行幸啓あらせられ、爾來　兩陛下共に氣管枝加答兒に罹らせられ、御咳痰強く、一時御困難遊ばされたれども、御發熱はあらせられず、蓋し今後御溫保あらせらるれば、漸次御輕快遊ばさるべし。

と、承りて臣民皆恐懼、一刻も早く御快愈あらせられん事を祈り奉る。

○御葬祭齋官　左の諸氏に、一月廿八日、御葬祭齋官仰付られ、尚　御出棺後御靈前の奉仕仰付られたり。

従一位侯爵　廣幡忠禮
従三位伯爵　甘露寺義長
正五位伯爵　室町公大
従五位伯爵　柳原義光
正二位子爵　長谷信篤
従四位子爵　藤井行徳
正五位子爵　千種有梁
正五位　大原重貴

（各通）

皇太后陛下御葬祭齋官被仰付
皇太后陛下御出棺後御靈前奉仕被仰付

○御柩供奉員　一月廿八日、左の如く辭令ありたり。

大喪使長官　威仁親王
同　事務官　公爵　九條道孝
同　子爵　田中光顯
同　男爵　三宮義胤
同　男爵　山田信道
中村元雄
同　侯爵　久我通久
同　堤正誼
同　男爵　山口正定
同　俣野一琢
同　松本荘一郎
同　矢野文雄
同　長崎省吾
齋藤桃太郎
多田好門
侯爵　木戸孝正
川内勝明
小西有勳
片山東熊
男爵　万里小路正秀
伊藤勇吉

皇太后陛下御柩供奉被仰付　木子清敬

○海軍儀仗兵指揮官　皇太后陛下御葬儀に關し、一月廿八日、左の如く仰付けられたり。

海軍大佐　澤良渙

皇太后陛下御葬儀儀仗兵指揮官被仰付

海軍大尉　仙頭武央

（各通）　海軍大尉　高木七太郎

皇太后陛下御葬儀儀仗兵參謀被仰付

海軍少主計　田中小太郎

皇太后陛下御葬儀儀仗兵指揮官秘書被仰付

○廢務仰出さる　皇太后陛下御送葬に付、二月二日、七日、及八日、各官廳事務休停すべき旨、さる月二十九日仰出されたり。

○御廿日祭　去月三十日　皇太后陛下御廿日祭を執行せられたり。御式は、十日祭に異ることなしと承る。

○皇太后陛下に謚を奉らる　皇太后陛下を、自今英照皇太后と稱し奉るへき旨、仰せ出されたり。

（一月三十日官報號外）

○減刑令、大赦令　さる月三十一日、官報號外を以てさの勅令を發せられたり。

朕茲ニ大喪ニ丁リ惠澤ヲ施サンカ爲特ニ命シテ左ノ條項ニ依リ減刑ヲ行ハシム

條項略す

朕茲ニ大喪ニ丁リ惠澤ヲ施シ臺灣新附ノ民ヲシテ洽ク皇化ニ霑ハシメムカ爲メ勅令第七號ニ依リ減刑ヲ行ハシムルノ外仍左ノ條項ニ依リ特ニ大赦ヲ行ハシ

條項略す

○御詔勅　さる月卅一日の官報號外を以て、左の御詔勅を發せらる。

朕玆ニ喪ニ丁リ各地方慈惠救濟ノ爲メ特ニ命シテ内帑ノ金ヲ出シ其貧ヲ補ハシム

この慈惠救濟の資は、整理公債證書を以て補はれ、其の額面四十万圓を、全國各地に下賜相成りたり。四海聖德の無量に感泣せん。

○兩陛下御名代　前項に記したる如く、　天皇皇后兩陛下とも御風氣に渡らせられ、京都へ行幸啓御見合せと相成りたるにより、　天皇陛下御名代を彰仁親王殿下へ　皇后陛下御名代を、仝妃賴子殿下へ仰付られたり。

○皇太子殿下御名代　皇太子殿下は、前號に記したる如く、尙目下沼津の御用邸に御療養中なるを以て、　英照皇太后　御葬送の節、殿下の御名代を、黑川東宮武官長に仰付られたり。

○英照皇太后御柩奉送　御豫定の如く、英照皇太后御柩は、去る二日御發棺あらせられたり。

御發棺の御日に當りては、悲しさも亦一入にて、天も哀れや催しけん、空かき曇りて日影ふたかり、草木も打ちしをれて見えにたり。

奉送の方々は各親王、妃殿下。各大臣を初め、官爵位勳ある人々は更なり、外國公使等、朝まだきより青山御所に集ひまつれり。

青山御所にては、午前八時より、御殿の裝飾をとゝのへ、軈て、久我齋主を始め、齋官の方々、御喪主有栖川宮殿下、大喪使侍官以下着床、次に御簾を揭げ、神饌幣物を供へらる、此間伶人の奏樂あり、物の音いとい哀をましつ、次に久我齋主祭詞を奏せらる。

兩陛下例ならずましますより、　天皇陛下御代拜伏見貞愛親王殿下、　皇后陛下御代拜山階宮妃殿下、並に御代拜御玉串を奉り給ふ。次に　皇太子殿下の御代

拜黑川東宮式部長官、御拜御玉串を奉れり。次に内親王三殿下の御代拜御玉串を奉り給ふ。次に御喪主宮殿下を始め、親王以下の御拜、並に拜禮御玉串を奉られたり。

斯くて、午前十一時ともなりぬれど、御棺を御輦に移し奉る。程なく御行列も整ひたれど、徐々と　御發棺あらせ給ふ。御先導の警視幷に儀仗兵の外は、供奉の輩皆徒歩なり。御喪主の宮殿下、喪服に素服を加へ、藁沓竹杖にて供奉し給ふ。近衛師團及第一師團の各隊は、青山御所より、青山假停車塲に至るまでの　御道筋兩側に整列して送り奉る。　御喪輦御通過の折は、皆捧銃の禮を爲せり、其さまなか〱に嚴なり。大典を拜し奉らんとて、青山の御道筋に群がり集れる臣民は、瞬く間に山を爲せり。去れど、さしも群集せる人民も、皆肩に帽に喪章を付して敬悼の意を表せざるはなく、能く靜肅を守りて、涙ながらに拜觀したりき。

奉送されし重立たる人々は、伏見（奉送兵指揮官として）閑院小松（若宮）、山階の四宮殿下、四宮御息所始め各大臣、樞密正副議長、勳位有爵者、各國公使、各省高等　官等　其數二千餘名の多きに及びたり。

○大宮御所御着　　御靈柩は　御道筋恙なからせられず、十一時十分大宮御所に御着柩あらせらる。一部の參列各員は、御門前に整列して奉迎し、御靈柩は殯殿に御安着あらせらる。

○御柩奉安式　　大宮御所　御着柩後、御靈柩は直に奉安所に移し奉れり。奉安所は　常の御殿。と稱し、南面したる美麗の御殿にして、二段の段上に御靈柩を安置し、了て神饌を供し、奏樂と共に祭詞を奏し、有栖川御喪主宮殿下御拜あらせられ、各女官、杉

皇太后宮太夫、高辻皇太后宮亮、田中大喪使次官心得、小西、伊藤、井上等の各事務官逐次拜禮し終て、又神饌を供し、奏樂ありて退下せり。

○御正殿の御通夜　御靈柩を奉安したる大宮御所内、常の御殿には、在京御近親の方々、及華族、女官等、來る七日まで交代して御伽申上ぐる筈にて、既に去る三日の夜より御所へ詰め、交る〳〵御通夜相成るよし。

○山陵工事の全成　山陵御工事は、本月四日にて全く竣成したりと承る。

○大葬當日の儀仗兵　御大葬當日には、第四師團より四千人、近衛師團より三千人、儀仗兵として警衛する筈なり。尤も京都市街の狹隘なる路傍に堵列する能はざるを以て、其街道の少しく廣き、三條寺町より佛光寺までと、伏見街道を巽町より瓦町へ二個所に、一列堵列する筈なりと承る。

●兩陛下　御容体　別項に記す如く、天皇　皇后兩陛下は、御風氣に渡らせらるゝよし承り、臣民皆草莽に伏して、一刻も早く御快愈を祈り奉らざるはなかりしが、其後の御容体を漏れ承るに、昨今にては、いみじく御輕快にいらせらるゝとぞ。いかばかり喜ばしき事にこそ。

●皇后陛下の御めぐみ　皇后陛下には、寒氣の砌東京慈惠病院の狀況を聞召させられ、去る廿七日、双子縞九十反、木綿裏地五十反、及び裁縫料金十七圓五十錢を下賜あらせられたり。

●孝明天皇三十年御祭　去月三十日、月輪東山御陵に於て行はせらる　孝明天皇三十年御祭の次第を承るに、先づ早朝御陵前を装飾し、軈がて午前九時と爲るや、諸員一同幄舍に着き、九時二十分御出門あ

らせられ、警部四名前驅を為し、儀仗兵第九聯隊(大津衛戍)第三大隊は月輪山下に整列し、神饌十二臺を供し奉り、其間五常樂を奏し、次で又御幣物を供し奉り、終て式典主任岩倉掌典は御陵前に祝詞を奏し、其より　今上陛下御名代小松宮彰仁親王殿下御代拜御玉串を捧げられ、次で　皇后陛下御名代小松宮妃頼子殿下、次で又　皇太子殿下御名代東宮亮足立正聲氏、同じく御代拜御玉串を捧げられたりと承る。又宮中に於ても其の御式を行はせらる〻筈の處宮中喪第一期中にわらせらる〻ことなれど、當日の御祭典は、御代拜にて、御拜はわらせられざるに付、諸員の參拜は總て之なかりしとの趣きなり。

●女子高等師範學校の生徒募集　本年四月女子高等師範學校に於て、撰科生五人の入學を許可せらる〻よし、志願者は來る三月廿五日までに同校に出願すべきにて、入學試驗は四月一日より仝五日まで施行し、其の科目等は左の如し、尚詳しき事は仝校に就きて聞き合はすべしとなり。

入學試驗科目

体格　國語(講讀、文法、作文)　漢文(講讀)　歷史(本邦)
地理(本邦外國)　數學(算術)　理科(博物、物理、化學)、家事(衣、食、住、裁縫)
習字(楷、行、草平假名)　圖畫(鉛筆毛筆ノ内一ヲ撰バシム)　音樂(單音唱歌複音唱歌)

体操、外國語ヲ撰修セントスル者ニハ、其學科ヲ試驗科ニ加ヘ、体操ハ普通体操、遊戲、外國語ハ英語讀方譯解ヲ試驗ス。

舊東京女子師範學校、及舊東京師範學校女子部卒業生、高等師範學校女子部及本校の小學師範學科卒業生、女子高等師範學科ニ箇以上の課程を修めたる者、本校附屬高等女學校補修科優等卒業生にして其の補習したる學科を修めんとする者には學力の試驗を須

ひす、又尋常師範學校女子部及修業年限六箇年若くは同程度以上、公立高等女學校卒業生にして當該學校長より品行方正學力優等の保證ある者には撰修せんとする學科の外學力の試驗を須ひず。

皇太后陛下の崩御をいたみ奉る

中村盛太郎

今我大八洲の國内は、哀悼の情滿ちにみてり。日月も光りを隱し給ふらん。峯の梢も、哀悼にむせびなん。千尋の海原も、悲しげなる浪をたゝへなん。あなかなしきかも、あないたましきかも。

皇太后陛下には、當明治三十年一月十一日、午後六時といふに、青山の御所にて崩御あらせ給ひしと、九重の雲の上より、仰せ出され給ひぬ。先つ頃、皇太后陛下の御不例に渡らせ給ふとは、承りつれど、日頃御健やかにおはしませど、速に天地の神の幸ひたまひて、御療養のみしるしあらはれ、九重の内の御歡びの御聲をも、洩れきゝまつらんことを、まち奉りしに、おもひきや、御悩みは、日にけにおもらせ給ひて、もろ〳〵の御療治も、みしるしあらせず、かくれさせ給ふ。あな此日はいかなる凶しき日ぞや。

天皇皇后兩陛下を始め奉り、御懿親の御歎きのほとを推し量り奉るもいとゝかしこしや。あらゆる臣民ひたすら袖をぬらさぬはなし。申すもかしこかれとも　皇太后陛下は、故關白從一位九條尙忠公第六の姬君におはしまし、御諱は夙子、天保四年十二月十四日、九條殿に御誕生あらせらる、華冑の御性として、淑德儀容かね備らせ給ふ。嘉永元年十二月十五日、御齡十六にて、入內まし〳〵、同しき六年五

月七日、御齡二十一にして、先帝孝明天皇陛下の、准后に立たせ給ふ。かくて紫雲いと濃かなるうちに、今上天皇陛下御降誕あらせ給ふ。慶應二年十一月先帝には、御齡三十七にましく＼て、後月輪の雲井に、雲隠れ給ひにき。同三年正月今上天皇陛下御齡十四にましく＼て、天つ日嗣の大統を承けさせ給ひ、明治元年三月十八日、皇太后の尊號を奉らせ給ふ。伏て惟みれど、先帝の御世には、覇府も奉護の實をあぐることを得ず。皇ら御國の安危は、一すちに、大御心にまとひ給へるに、先帝には英明にれはしまして、天日の落るを回し、倒るゝ狂瀾を起し給ひ、此の明治の大御代の基を開かして、之を今上天皇陛下に遺し給ひける盛德、大業、前古に比なき、御聖德は、申すもかしこかれど、是一つには、皇太后陛下の淑貞にましく＼て、御内助の御力、預りて多からせ給ふことは、夙に洩れ承る所なりき。まして早く父帝に後れ給へる、今上天皇陛下を御愛くしみ立て給ひ、御教へ導き給ひ、聰明英智允文允武父帝の御志を顯彰し給ふに至らせたまひし御母儀の御德は、稱へまつらん言の葉もなし。今上天皇陛下の大御代となりては、常磐なす靑山の宮に坐して、九重の雲いと淸く、菊のかをり園生にみちて、天下の母たるものに、母儀の鑑を示し給ひ、剰へ天か下の民草を惠みはし給ふ御事に、御心を注ぎ給ふことは、古の光明皇后にも過させ給ひけり。斯れは、億兆の國民は、御齡の幾千萬代も、大坐しまして、常磐に堅磐にと、祈り奉りしに、俄に雲井に隠れさせ給ふ。我等臣民たれかはいたみ奉らさんや。いま

皇太后陛下の御美德を洩れ承るに、平素頗る御謙德を守らせ給ひて、奉仕の人々へも、質素を旨とせよとの常々の御掟にて、御宮內は悉く　先帝御在世のまゝにもの事行はせ給ひ、花の御慰み、月の御宴など、大方は行はせられずとかや。あるときは異國の品さへ御進め申すこともありけれど、奉仕の方々にのたまはせらるゝやう、昔　先帝のいまし〻頃、一雙の金屏風を望ませ給ひ、ろか値　僅に四十金なりしも、御心に協はせられざりし事もありしものを、今の御代となりて、如何に心に協ふこと多しとて、昔忍ばてやはと、奉仕の方々思はず袖をしぼり奉りしと、後、　皇后陛下にも、この大御言を聞召されて、いと御感ありて、常々御儉素を體し給ふと承るも畏しや、又預て、博覽會展覽會等より、時々御買上あらせられたる、織物器物等の御品は、追々下々へ下し賜はり、御手許に留めさせらるゝは、いと少く、又每年御避暑に、葉山の御用邸に行啓あらせらるゝ折などは、海岸に出御まし〳〵て、磯邊に寄するさまざまの貝類を、御手づから拾はせ給ひて、これを何よりの御樂として、其の種類を分ち、美麗なる御箱入として、御愛玩あらせられ、皇子皇女殿下の御伺候のをりなどは示し給ひて、御なぐさみとし給ひきとかや。

又過ぎにし年、　今上天皇陛下には、御內費を節したまひ、製艦費に下し賜はんとの御詔に、

朕が常膳を減ずるも、皇靈殿の御祭費と、　皇太后陛下の御內費とは、つゆな動かしぞと宣へりき、侍臣詔を畏み、青山御所に參り、聖旨を奏せしに、世を遁れし老の身は、世にもとめなけれど、其費こそ省けよかし、御代を知ろしめすことゝて、內外にはからぬ

費ひて多かりなん、とて、御ゆるしなかりけれど、また其の御旨を、奏聞し、かくしつゝ侍臣は、數回の往復をなしゝ事もありしとかや。かくしのび奉りても、今はかひなし。たゞ劣心にくりかへし奉りて、いたみ奉るになん。

●末松文學博士の講話

婦人の務(つゞき)

私が泉岳寺で、義士の木像の在る所へ這入つて見ると、田舍の爺さん婆さん杯が來て居つて、ヤア力彌はどこだ、天川屋儀兵衛は何處だらう、千崎彌五郎はどうだらうかと云ふ風に、木像を探して其爲人を欣慕して居る、大石由良之助は勿論の事である。と云ふ樣なる風が田舍にも傳はつて居ります。此氣風は決して盡滅させてはならない。成程今日に於て、四十七士のした樣な事は、すべき時で無し、又なす樣な時も出て來もしますまい、且又此如事柄を、今日の普通の修身教から論じますれど、或は矯激に過ることもありませう、併し、斯う云ふ手本になる樣なことは、一國にさう澤山は無いのである、矢鱈には無い、孝子傳の如きも至極宜いに相違ない、けれ共、各藩に出來たる樣な孝子傳、一冊の中に二十人も三十人も書いてある樣な孝子傳、其名も人が覺へない樣なのでは感じがチヨイト薄ひ、古來最も名高いものであつたならど、曾我の夜襲とか、又四十七士とか云ふものになると、一國の名話となりて居るから、感じが移り易い、夫れで斯う云ふ風のことを、家庭の教育には、繪抔に付て敎へるといふことが大變に利益があるたらうと思ふのであります。夫れど、又日本人が、

一種世界に勝れたる性質は、是まで重もに、士族が養つて居つた氣象から來たのであります、金錢抔に拙い心を出さぬといふ、即ち鄙吝の心の少ないといふ事であります、以前の士族でありますと、是はマア夫れ〳〵其君主から祿抔も頂戴して居つたが故に、さう金錢の末に奔走する事も要らなかつたから出來た譯でもありませうが、何にしろ士族の氣風は、一種高尚な風がありました、夫れは今日までも矢張り殘つて居るので、之を支那人抔に較べて見ますると、同日の論で無いのであります、固より日本でも、夫れに拘らぬ人もある、即ち除外例なしの規則は無いと云ふこともありますから、日本にもさう行かない人もあり、亦支那人にもさう行かない人もありませうが、槪して言へば、支那人の氣風は、金錢を愛する念が頗る盛んである。是は私も殆んど了解し兼ぬる位である、其故は、支那の重もなる敎は儒道である、佛敎杯といふものは格別勢力は持たない、勿論天子樣で佛を大に信じたる人もあつたのであるが、一般に佛道は大きな勢力を持つて居らぬ、宗旨として持つて居る程の勢力は見えない、士君子以上の修むる所は、孔子孟子の學問である、孔子孟子の學問は、最も忠孝仁義の敎をなしたるものであるが、其理窟の敎方が惡かつたか何かで、支那では今日一向實用をなさぬ、サッパリ詰らないのである、國家としては理財の事杯も一向詰らないのであるが、一人〳〵としては至てシワン坊である。至て慾張りである。

（未完）



二月五日兼題　山家初春

天

鶯もはやねにつれてやまさとは
　春そみやこにおくれさりける
徳島市八百屋町壹丁目　宮本あさ子

地

よそうとき遠やま里もうくひすの
　もらす初音にはるをしるかな
三重縣阿山郡府中村字佐楽具　服部勝美子

人

薄かすみたなひく見れは雪ふかき
　この山さとも春はきぬらむ
東京神田區三崎町一丁目十一番地　仁井田とみ子

秀逸　（十五首）

白雪のまたきえあへぬやまさとは　花山きのと子
　なくうくひすに春そしらるゝ

いつしかも春きにけらし山さとの　美奈井芳子
　をかへの松にかすみたなひく

あつさゆみ春きにけらしやま里も　住山幾子
　けさはのとかに霞たなひく

山さとは雪もけなくにきのふけふ　中山嘉壽子
　かすみそめたる空ののとけさ

炭かまのけふりにくもるやま里も　木村みつ子
　けさはかすみて春は來にけり

消え殘る雪もかすみにうつもれて　田中冬子
　長閑に明くるはるのやまさと

雪の中に春し立てれぞやまさとは　三谷起美子
　なくうくひすの聲ものとけし

ゆきふかみとふ人もなき山さとは　山田璋子
　かすむそらにや春をしるらん

かきくらしわか山さとは雪ふれと　眞鍋直子

よは春なれやうくひすのなく

春のきて岩間のこほりとけぬらん　近森のぶ子
かけひの水もかよひ初めけり

湖かすみ立ちなひけとも風さゑて　田代　艶子
春にはうとしみやまへのさと

のきちかくなくうくひすの初聲に　北川はな子
はるしりそむる山のしたいほ

山里はゆきこそ消ゑぬ打ちなひく　太田　貞子
かすみに今朝は春をしるらん

山里もたのしくなりぬゆきわけて　山本きよ子
はるのしるしの梅たつぬへく

世のうさをとふ人もなき山さとに　西元もと子
初音のとけくうくすのなく

（以下原稿到着順）

梅のはな一枝にほひてはつはるを　佐々有郷子
しらせかほなる山かけのいほ

山かつかのきのけふりも初はるの　佐々小琴子
かすみとともになひきぬる哉

うくひす春のつかひに來にけらし　田代　綾子
けさ山かけにこゑのきこゆる

訪ふ人もまれなる宿にうくひすは　倉山　道子
はるのはしめをつけてける哉

住む人もまれなる山のいほなれと　楠　精子
はるを告けぬるうくすの聲

れく山はこゝろにかゝる塵もなし　島田　好子
まつのしらへにはるを覺へて

足引のやまのしたいほゆきとけて　野田千代子
はる立ち歸るおともみゑけり

山里にうきよのことはしらゆきの　西村　芳子
ふかき柴戸もはるをむかへて

里とほきみやまの奥に住むひとや　秋園きく子
なくうくひすに初はるそ知る

けさよりはかけひの水も通ひきて　松原　常子
はるめきにけりやまの下いほ

軒ちかくはつうくひすの聲すなり　井出すゝの子
賤かふせやもはるやきにけん

まつかせの音はかりなる山さとも　福原　蘭子
春立ちけらしうぐひすのなく

やまさとは雪ふかけれと月かけの　大森　純子
かすみそめしにはるをしる哉

よにうとき深山の陰も萌え出つる
くさのみどりにはるをしる哉　町田　鶴子

咲きそめし垣根の梅にやまさとも
冬のへたては見ゆるなりけり　永井さい子

峯ならてとなりまれなるやま里も
のこりたくれぬ御代の春かな　山口やす子

消えあへぬ深雪かすみて人とはぬ
わか山さともはるはきにけり　木川　里子

白雪にうもれなからもなにとなく
ゆたかに見ゆるやまさとの春　花山保江子

きえあえぬ雪をみなから遠かたの
山はかすめりけふのはつはる　花山　操子

山里もはるはきにけりうくひすは
けさ鳴きそめて梅も咲きけり　横田　秋子

移りゆく月日もわかぬやまさとは
軒のかすみにはるそ知らるゝ　諸井　貞子

たにかはの氷もとけぬやまさとに
春くとつくるうくひすのこゑ　武田　玉子

うくひすのなきてつけすは山棲は
春のきぬるをいかて知らまし　瀬戸　榮子

たつかすみみてれとろきぬ山里は
いまたかきねの雪もけなくに　滑末とみ子

うとめ堀り蕨つみにとみやこひと
杖曳きそむるはるはきにけり　牧山幾世子

人とはぬみ山のれくもうららうらと
かすみをさそふ春はきにけり　徳永萬壽子

消えやらぬこの山さとの雪のうちに
いつこよりかは春のきぬらん　仁保　碁子

世にいてぬいははのつら乖昨日けふ
解くるしつくに春をしるかな　鳥山百合子

山さとの松のしらゆきとけそめて
しつくはかりの春はきにけり　鳥山千代子

花鳥にとめるたもへはうらやまし
やまの奥にもはるは來たれは　星野かす子

來しはるはさたかならねと鶯に
やまのすまひもなつかしき哉　星野ひと子

梅にはひうくひすなきてやま里の
春のはしめはみやひ來にけり　星野康世子

世はなれてすむやま下の庵までも
おさひうらゝに春はきにけり　鹿野　靜子

やまさとの賤か軒端のうめさきて
なく音ゆかしき谷のうぐひす　錦織　幸子

よにうとき山下いほもきのふけふ
かすみたなひく春はきにけり　遠藤のよ子

ふりつみしみ雪は冬のまゝなから
かすみたな引く小野の山さと　名取正代子

いつしかもかけひの氷とけそめて
我すむやまもはるめきにけり　坂田きみ子

山ふかみ雪はきえねとうくひすの
なくなる聲にはるそ忘らるゝ　日高かず子

朝ぼらけなくうくひすのはつ聲に
はるしりそむるやまかけの庵　加藤壽枝子

山ふかきしつかふせやも春きぬと
かけひの氷とけそめにけり　羽田三緒子

ふりつみし雪またとけぬ山さとも
はるきにけりと霞そめたり　河田いし子

ふる雪を花とまかひてうくひすの
谷の戸あけてきなくやまさと　得田　文子

春たては花とこそ見めやまさとの
垣ねのうめにつもるしらゆき　得田なか子

昨日まてこほりし水もとけそめて
やまたのさとは春めきにけり　得田　淑子

やまさとはけさとけそめし川水の
なみとゝもにそ春たちにけり　得田琴湖子

ふく風に春やこもれるやまさとも
またぬつらしきうくひすの聲　森山　光子

山窓にふゆこもりせしゆめさめて
けさより峯もかすむはるかな　犬甘　芳子

寒さゝへ折りたく柴にわすられて
はるこゝちする深山邊のやと　吾妻　近子

梅もさき雪ものこりてなかめさへ
みやこにまさる春のやまさと　舘脇ます子

こほりゐしかけひの水の音つれに
春しり初むふやまのしたいほ　諸井久良子

ものかけの雪また消えぬ山さとも
吹く風ぬるみはるは來にけり　柳田　里子

山ふかき宿にしわれとわらたまの
春立ちそめしけふそのどけき　戸塚てつ子

山里はたにのといつるうくひすの
こゑのはつねに春をしるらん　小町谷里江子

山さとはまたきえやらぬ雪のうちに　小町谷園子
かすみへたてゝ春やたつらむ

柴の戸をさせる庵にもはるとてや　澤野芳子
梅も咲き初めうくひすもなく

すみかまの烟もけふはかすむなり　加藤さく子
春の立ちぬるゑるしなるらん

山さとに家居しをれはうくひすの　吉野波字子
はつねうれしき春のあけほの

ゆききえぬ片山さとのしはかきに　土肥仙子
うくひすきなく春のはつこゑ

やまさとのいほりもけふは靑柳の　森雪子
いともうれしき春はきにけり

奥山のしはのほとりもつくるけふ　森琴子
はるやきぬらし霞たなひく

ふりつみし深山のいはのしらゆきも　森國子
はるたつけさは風にとけつゝ

山の井にわかみつくめる音すなり　金子はつ子
けさより春のたちやそむらん

山里はつきにかすみて見ゆるなり　吉田靜子
ふりにし雪のきえやらぬまに

わか宿は霞みにけりな今日よりは　吉田八重子
谷のをかはのみつやくまなむ

風ぬるみ松のこすゑもかすみけり　松村綾子
春とも知らぬやましたのさと

一夜あけて春としいへは山さとも　鈴木よし子
雪ふりなからかすみそめけり

風さむみまだ雪消えぬやまさとも　永井英子
はるきにけりと霞たなひく

やまさとの宿かつま木の夕けふり　壺井美幾子
かすむをみれぞ春立ちぬらし

跡たえて人たにとはぬやまさとの　靑木春子
しつかなる代の春は來にけり

のとかなる春やきぬらん山さとの　田津木久子
雪のうちよりうくひすのなく

君か代のめくみの露にやまさとも　都志津子
はるきたるらしうめの花さく

山里はまた消えやらぬ雪のうちに　大熊まさき子
春は來ぬらんうくひすのなく

へたてなく春はきぬれと空さえて　河野文子
ゆきふりまさる山かけのさと

きゝわひし軒のまつ風たえたえて　梨本　信子
空ものとけきはるのやまさと

山さとはまた寒けさの身にしめと　伊藤　清子
なく鶯におとろかれつゝ

こほりゐしかけひの水も音たえて　清水わい子
やまのいほりに春はきにけり

しはのとにかゝるゆき消の雫こそ　藤林ます子
春たちそめししるしなるらめ

わか山のかすみの色はうすけれと　矢野うめ子
袖さむからぬはるのはつかせ

つゝらゐしかけひの水もうち煙り　岸　せつ子
春たつけふの音になかれつゝ

山ふかみはるをもわかぬ我いほに　岸　せい子
けさ珍らしくうくひすのなく

とふ人もなきしはの戸にやり水の　星野　曆子
音してけさははるそきにける

氷りゐしかけひの水もとけそめて　田島　龍子
賤かのきははるめきにけり

うくひすの初音待ちわひて山さとは　佐藤よし子
のとけき春をしりや初むらむ

こそのまゝ雪ふりとさす山さとも　齋藤さく子
けさのかすみに春をしるらん

とけそめし雪のけしきに山さとは　守山比古子
春のたちぬとまつしられけり

曆だにわらぬみやまのしつか家は　懸田ふさ子
なくうくひすに春をこそしれ

はるきぬといかてしらまし山里は　渡邊たつ子
日ならべて猶ゆきはふりつゝ

峯も尾も雪きえやらぬやまさとは　木口いつ子
なにゝしらまし春の立ちぬと

谷川のこほりもけさはとけ初めて　内田つる子
はるはよとます流れ來にけり

やまふかきしつかふせやの柴垣に　和田わい子
春やきぬらんうくひすのなく

人たえししはのをり戸に春きぬと　和田ふち子
初音ゆかしくうくひすのなく

山里のしつかふせやもれしなへて　和田かをる子
長閑きみよの春はきにけり

世にうときみやまの奥のふせ庵も　高田きよ子
なくうくひすに春を知るらん

はるたちて都のそらはかすめとも
ゆき打ちふゝく越のやまさと　吉澤布施子

やまさとの賤か伏屋にはるたちて
まつさき匂ふうめのはつはな　伊東うの子

とちこめし筧のこほりとけそめて
はるたちけらし奥やまのさと　伊東いそを子

山川のこほりもけさはとけそめて
ふせやの庵にうくひすのなく　櫻井りん子

笹の葉にさえしやま風うちぬるみ
今朝は春にもなりにけるかな　有坂　清子

うくひすの初音きかすは春來ぬと
いかてか知らん山すみの身は　春永己巳子

新玉のはる立つけふをはつひかけ
にほへる山のさとそのとけき　荻原　章子

うくひすも谷の戸出てゝ軒ちかく
先つ立ちそめし春を告くらん　大谷津琴子

山彦のこたえもまたてうくひすは
春立つけふをうたひ初めけり　小曾根しう子

なに事もれくれがちなるやま里も
春はきにけん今日ののどけき　石川すけ子

とち果てしかけひの氷とけ初めて
やまへの庵にはるは來にけり　中桐　杏子

山さとのかきねは雪にうもれとも
春はなか〳〵へたてさりけり　野口みよ子

鶯はまた來なかねとやまさとは
軒端のうめそこよみなりける　鷹取　久子

いつのまにはるやきにけん山の庵の
軒端もかすむきのふ今日かな　遊佐しけ子

とひ來へき人のまれなる山さとも
春のひかりはおくれさりけり　鎌田光惠子

春されははにふの小やの山さとも
梅さきそめてうくひすのなく　鈴木まさ子

たよりなき山の庵をもよそにせす
霞たちこめはるは來にけり　鈴木ふさ子

うちきらし雪はふれとも山さとの
はるたつけさは寒けくもなし　岩城まつ子

花こよみひらきもあへぬ紫の戸に
はるをつけたるうくひすの聲　高田よね子

枯れはてし人めも草ももえそめて
我か山さともはるめきにけり　林　久子

やまさとの雪のふるやの梅か枝に　仁保志磨子
春つけそむるうくすのこゑ

何となく春めきにけりやまさとも　高橋ふぢ子
嘶くこまのこゑのきこえて

山家にもはるのしられて長閑なり　高橋たま子
東風吹く音の木々にひゞきて

こよみなき深山の奥も何時しかに　尾島治子
長閑けかりけるはるは來にけり

わけまきか小牛をつれて山路行く　山路留子
路のこほりも今朝解けにけり

訪ふ人もあらぬのきはに梅咲きて　板倉里子
山のあるしもはるを知るかな

去年よりのゆきは高峯に殘れとも　板倉嘉子
かすみに春のいろ見えにけり

山里も何時しかはるのうつり來て　板倉勝子
かけひのしつく落ち初めに鳧

山さとの柴のあみとの我か家も　澤田ゆひ子
かすみたなびく春はきにけり

さと遠くせりつむこらか聲すなり　小倉たみ子
しはのとはそは雪もけなくに

山かつのいともわひしき住ひにも　田巻ひてよ子
はる知りそむるきのふけふ哉

山かにもいつしか春はきにけらし　田巻みす子
ゆきまの小草もえいてにけり

やまさとそうれしかりける都にも　石川類子
まさる詠めのはるのきけれは

やまさとはかすみに花にもゝ鳥を　石川きん子
友となさなんはるはきにけり

風さゆるやまのした庵うくひすの　寺井登起子
聲よりほかのはるなかりけり

うくひすの谷のと出つる聲もして　廣田とめ子
わかやまさとは春めきにけり

やまさとの筧のこほりとけそめて　稻葉せゑ子
今朝長閑にもはるは來にけり

氷りゐしかけひのみつのおとたてゝ　新田のり子
吾か山里もはるは來にけり

人とはぬ此のやますみの賤か家も　渡邊貞子
霞そめけり今日此のころは

きのふまでわびしみ山の賤か家も　渡邊かん子
のどかにかすむはつはるの空

消ゆのこるゆきの光もうすらきて　宗岡しゆん子
わかやまさとに春はきにけり

やますみの梅が小枝にうくひすの　愛久津備子
來鳴くにわれは春をしりそむ

二月五日兼題　雪を見て

天　播磨龍野　眞鍋直子

雪のあしたはとこゝろよきものはあらし。日頃、いふせく住みわひぬる家居のさまも、けふはかゝりは、ことかわり、白かねをしきつらねたらんやうにて、いさゝかのちりもとゞめす、見渡す限りの野山の、白く〳〵と清らかなるなと、見るまゝに、おのつから心さへいとすか〳〵しうなりもてゆくにつけても、この雪をあつめて、ともしひとし、書なとよみけんいにしへ人のことゝも、思ひいてられて、いよゝこゝろのすみわたりてなむ。

地　肥後國熊本市京町　木川里子

かしましかりし霰の音、夜ふけてやみにしは、玉をしきたらんやうならんと、とく起き出て窓の戸をひらきければ、いつのまにふりかはりけん、冬枯の草木の枝は、そりたかへて、春にしられぬ花さき、雀の軒にむらかりて囀るも、いとをかし。見はたすかきり、白妙に、遠里小野までも、あくかれぬへきさまにて、わが園ながら、めづらしきこゝちせられ、香爐峰の景色とやらんもゆかしく、み山の里にはあらねど、春の花秋の月にもおとらぬは、今朝の雪の眺望になんありける。

人　甲斐國甲府市山田町　名取正代子

きのふ夕つ方より降り初めしみ雪、深くは積るまじう思ひしに、今朝とくおきいでて見れど、近頃珍しき大雪にて、一尺斗りが程積りたり。日頃、朝いねなるわらはべども、此雪を見て、おきよとの聲をもまたず飛び出で、庭におりたちて、喜びのゝしるも聲をかしや。かくて、庭の面をながむれど、木々の梢は、時ならぬ花さき、拂はぬちりは、埋れて玉しきわたしたらん樣なり。されど、けふはしも、たれかれよびつどへ、此雪をながめて、歌やよまん、文やつゞらんなど、いひつゝ、ふとかなたを見やれど、あはれにも、日頃めでつる四季咲のいばら、土につくまで雪を負ひ、軒の呉竹もたわみふし、去年の春

移しうゑにし姫こぶしの、枝も折るゝばかりなるを、あなあはれ〳〵と、今はふまゝくをしと思ひし庭の面をも打忘れて、ふみあらしつゝ、これかれ直様かきはらひぬ、さるが中に、依然として、きだかに立てるは、常盤かきはに變らぬ松の緑になんありける、いみじう雪を負ひたれど、たわむべきけしきも見えぬは、是なん千代もへぬべき操ならまし。いと〳〵めでたきや、いかで此松を心ともがななど、思ふまゝを、けふ來む友にも見せまほしと、かくはしるしつ。

佐々有郷子

けぬがうへに、またもふりしけ、はるかすみ、たちなむみゆきまれにこそみめ。と、女の童が板戸おしあけ、こゑたからかにうたへるは、かの古今和歌集のなりけり、ふと目覺めて、窓のもとに立ちよれど、軒の老松には、十かへりの花とまがひてふりつもり、庭の寒菊も水仙も、ひとつにはひの白銀花をぞさかせたる、時にとりてはおもしろく、いやさやに銀世界ともいふべからん、うるはしきながめに、身にしむさむさもうちわすれ、しばしたたずみたるに、またも女童は、師の教へおかれし書帖を、机にくりひろげて。うめがゑにきゐるうぐひすはるかけてなけどもいまだゆきはふりつゝ。と、復誦す、げに舊暦の正月も立ちかへり。立春ちかくなりぬるものから、今日のには又をかし。妾は雪の光に心ひかされ、なにひとつうかむぬも口をしや。

福原瑾子

夜半より、さら〳〵と、窓うつ音さへして、寒さわきて身にしみしもことはりなり、東の空まだくらきに、庭の面わかき今朝の初雪、げに玉やしくと、疑ふばかり、木毎に雪の花咲きて、いづれを梅と見分けかぬるもをかし。やむごとなきわたりは、いともかしこし。都も鄙もおしなべて、雪見の宴や開きぬらん。さはいへ、おもへばすぎにし年の此の頃は、いかばかり、軍人の此雪にくるしみしよ。なやみしよ、雪に心なくとも、などて見る人に心なからめやは。世の人、みなわれと同じかんじならんと思ひてかくなん。

山口やす子

ある日、書齋にとぢこもり、つれ〳〵をなくさめん

と、もの丶ほんをひもときたるに、もろこしの孫康といへる人が、雪のひかりにて書物をよみたることども、かきしるしあるくたりをよみつゞけたる折から、寒さいやまし、障子に、はら〳〵とかすかに音しけれど、なにやらんとれしひらき見れは、あなたき丶のかめ空めすらしきもの、ちら〳〵とふりくるさまのゆかしさ、静なるは花ともちり、亂る丶は蝶ともまひ、廣き世界はまもなくしろがねにつ丶まれ、木々のかれゑに、時ならぬ花をさかせ、岸もてむすびし賎がやは、いつのまにか。ぬのをさらしぬ、いつこより來りけん、掠の樹に稍にとまりし鳥も、いつになき白きものをきてをりしが、おのが羽風にてちる雪にや驚きけん、かゞと鳴きて飛び去るさまのおもしろさ、隣家のやねの鬼瓦の、似あひもせぬは丶かぶりせるさまの可笑さ、町なかもいとしつかに、ゆきかふ人はまれど、ひとつれの少女子が、笠をもさ丶ぬふりたれかみに、こ丶ろありげにの雪の花、一ひら二ひらかさすもやさし、殊に男の子のわらはへか、學びの道のかへるさに、雪うつさまの勇ましく、だるまを作り喜びあへるさま、げにおもしろきながめなりけり、か丶るいみじきけしきを見るにつけても、思ひやるは西の都や東の闕、いかにみやびをたちのしもとをひき、時をゑがはにめでいるなまし、左りとて、今もふりゆく世のなかに、彼の孫康に習ひて、學びの道につく人かはある、雪を見るにつけ、心に感るは此らの事になん。

廣野静子

朝とく臥床を出て丶眺むれは、めつらしく豊年のしらせはいつしかとのみ、日毎に待ちわたりし思の雲の晴渡り、世は一様の銀世界となりて、春雪のいやつもりて、さし出る朝日の影、きら〳〵とか丶やき渡る社、なんとなう心のすか〳〵しくて、我大御代のため、いとうれしく、いさ明暮心へだてぬ友と、とよとしのしらせの雲をめてはやさんかし。

錦織さち子

春立ちて日はうら丶かに、園生の梅も笑み初めて、今朝は、鶯も床しく歌ふ長閑さ、遠き彼方の山々には、殘る寒さに積りにし雪の、なほ消ゑやらで、東處西處白う見ゆ、げに彼の雪の清らかさ其の氣高さ、人の心も斯く清かりせど、いとも嬉しきものを、世に

はおのれどとき淺果敢なるもののあるぞかなしき、あはれ我身の我れながらうたてきかぎりなり、氣高き雪、眞に彼の雪の、消えにし後はいかならん、麗なる花紅葉のくさ〴〵をながめ、心も晴れ氣も長閑にぞ覺ゆる、人の身も巳が心の淸かりせば、其の身終りし後までも、いと香はしき名をも揚げなむ、花紅葉は美しけれど、ちる折もあるを、揚げにしほまれこそ、千代よろづ代の末までもつきせじ。今しも、遠つ山邊の雪を見て、そゞろ心動きて、かくはしるしぬ。

坂田きみ子

よべより降りしきりし雨の、いつの間にふりかはりけむ、今朝は賤が伏屋の所せき庭も、さながら白妙にうづもれて、幾日も拂はざりし塵さへ、いづちいにけむ、一夜の程に、玉しきの見所ある庭の樣とは成にけり。いざ、けふは、心あへるどち、雪見がてらに圓居してまし、さしたるまうけはなけれども、宇治山の木の芽に、釜の湯たぎらせつゝ、花月の遊びに、かたはら歌よみ文かきなどせんは、いかに樂しからましと、思ひたちて、むかへのものいでたゝす、

やがて入きたりし五人の友垣、同じ心にやありけむ、いと喜びて、共に木のめぐみかはしつゝ、庭の面をながむれば、今しも、木々の梢に、朝日の映りて、雪の花さへ、まばゆきまで光さしそひぬるも、いとゞうるはしく、且雪は豐年の志るしといへば、ことにめでたし。とやかくやと雪につきての昔語りなど、中垣のへだてなきまゝに、おのがじゝいひのゝしるを、きくあろしは殊にうれしくて、いかで、此けしきをなほやはあるべき。歌に文にものせんとて、まづあやしき歌よみいでけるは、

思ふどち心の春をにほはせて
雪の花見るけふのうれしさ

日高かず子

夜半よりの寒さに、起きも得やらでありしに、今朝は常にもあらず、幼子どもたちさわげば、おのれもやがて起きいでぬ、妻戸押し明けて見れば、何時の間に積りけん、かきはらはぬ蓬か庭も、玉しき渡し、枯れたる木々に、時ならぬ花さへ咲きいでゝ、そよふく風に、あすこのもこゝのも、言ひ合せたらん樣に、さら〳〵と音して落ち來る樣、げにいひしらず

をかし。あはれ、敷島の道にすぐれたる人ならんには、大和うたなどよみいづべけれど拙き身の口惜しやと、思はず獨ごつ折柄、妹の走せ來て、姉君よ〳〵、めでたまふ梅の若枝、積りし雪重げに折るゝ斗りになりぬ。とく〳〵下り來て、はらひませといふ。あな愚なる事ないひそ。如何に重くかつは冷かなりとも、えはしよく忍びさゝへなむ、やがて朝日の昇るにつれて、おのづからとけぬべし。かくてこそ、花美しく香も淸けれ。御身なみ〳〵の女にすぐれて生ひ立たんには、かの梅の如く、辛苦を忍び、寒さに堪へてまなむでやはなど、さとしがはなるも、我ながらをこがましくてなん。

得田なか子

春としいへど、あけやらぬ此頃のそらのけしき、わけて越路なる名も白山のふるさとは、ふるしろたへのひまなくて、田道のけじめもなううづもれぬ。さらでだに、訪ふ人まれの我やとは、いみじうさびしさのまさりてなん。人目もくさもかれはてし野邊には、たゞ靑麥のをちこちの雪間をわけて、ほの見ゆるのみ、よべはよ一よ、嵐も吹かなくていと〳〵長閑に、しづまりぬ。されど今朝はうめの花もほころびぬらんと窓おしあけてながむれど、木々はくまなくやよひの花ざかりとはなりぬ。あなめづらしと、此方へ近くさし出でたるを一枝たをれど、はら〳〵とかひなにちりくる二ひら三ひら、花にはあらではかなきゆきげのみづにてなん。

赤江よね子

寒けきあした、窓を押し開けて庭をながむれど、雪多く積りてけり。其淸らかなる、たとへんにものなし。昨日までは、物淋しかりし木々の梢も、一夜の中に、時ならぬ花咲きみだれ、一つ色にみねし有明の月、山の端にかたぶきて、旭の光照りあひたる、いはん方なくをかし。泉にうつりたるも、また。しもしありて、唱歌しつゝ、二人の同胞出で來、物の色を雪に打ちかけぬ、今まで淸らかに白かりし雪も、あるは靑う、あるは赤うそまりぬ。藍に朱に交れど赤くなるとかや、げに、人も交はる友により、よきにあしきになりぬなり。己がじゝ、天より受けし赤心の淸なること、いかでか雪に劣らざらん。さるに、もし其友の心樣惡しからんには、雪のさまざまに染ま

るを、其理りいかでか異らん、かへす〴〵友は撰びて交るべきものなりけりなど思ひしまゝをかくなん。

横山まさ子

夕の空のけしき、風吹きあれ、雪もよひにていみじくさえわたれど、いと心もなくて寢ぬ。朝戸あくれど、思はずに雪は庭の木々をよそひ、地には尺あまりつもりぬ、清少納言の、香爐峯の雪は簾を撥げて觀るてふ言葉うかみて、思はず手をあげぬ。有明の月の、ほのぼのと影しらみたる山の端を見れど、清さのひとしほまさりて、白金の高殿、の臺もみゆ、雪は其色眞白にして、其つやゝかなる、其清らかなる、くらぶべきものなし、人にして心の此雪に及ばざるもの多からんかし、かゝる清き雪にもあるは雪間へだてぬ松が枝の高き操の薫れるが上に、積るあり、あるは大路にふり布きて、忽ちにふみにじらるゝあり。されど、雪は木高き松にのみつもらず、降れどくづさるゝ大路に又降りしくは、さらにうしと思はぬなるべし。いでや、人と生れては、甲斐もなく呉竹の世にぬき出でんふしなくてあるべき、されど、我はかたは、このことをわきためぬにあらざるべけれど、ともすれど、始めの志打絶えて、つらきをのがれんすべもかなと、身をのみ愛くしむ人こそ多かりけれ。これらぞ雪に劣るとやいふべからん、世の物學ぶ徒、などてふるひたゝざる。

金子はつ子

山寺のかねにおどろき、おきいでて、やりど引きあくれど、よ一夜ふりしみゆきのはれわたりたるは、えもいはずをかし。野も山も、かぎりしられず、白妙に、すみなれし庭のけしきも、たへなりけり。しはしうちながむるほどに、ふとうかびしは、古へ人のいひのこせる、婦人の行爲はゆきのごとくあれかし、その降るや音なく、其つむや汚濁をへんじて白金となすの言の葉なり。うべなるかな、世の婦女子たる人は、心ばへ、けだかく、かつこまやかに、ふるまひ、言葉も優にやさしきこそよけれ、つら〳〵、古今に名をあげ、大事をなしたる人を思ふに、大かた、母のかしこきに、あらざるはなし。げに子の良否母たる人の德の有無にぞある。あゝ婦女子の行ひ、この雪のごとくあらまほしなど、思はず、ひとりごたれつゝ、わが行ひをぞたゞかへりみたる。

鈴木よし子

昨日の夕ぐれより、空いとくもり、さむささへきびしうなりけれど、今日は雪にてあらんと、朝まだきよりおきいで丶見やれど、思ひし如く、昨日の姿とは打かはり、天の下はおしなべて、ましろにぞなりける。其さまの、あまりにをかしければ、弟の枕邊にいたり、とくおきて見よかし、雪いみじうふりけりと、ゆり起せば、やをらおきいで丶、見てありしが、やがて、妾に打ち向ひ、姉上よ、おのれの學校よりかへるまでは、こ丶の雪ふみちらし玉ふなよ、おのれとくかへり、雪もて人形をつくりてんと、やがて、學校へはゆきぬ。然るに、今日は、天氣殊にうるはしく、いとあたゝかになりければ、雪は次第々々にきえそめて、晝すぎのころは、はやのこりすくなになりぬ、午後三時すぎころ、足音とゞろにふみならして、只今かへりぬと、先づ表の障子打ちあけしは、弟にやあらん、忽ち、あわたゞしく、妾のところにきたり、姉上よ、なぜ、かくふみけし玉ひしぞ、今朝の言葉をわすれ玉ひしかと、うらむる様になじりければ、いなよ、いで其よしこまかに聞かせてん、それ世の中は、飛鳥川の淵瀬、つかのまも常ならねど、時うつり事さり、樂しみかなしみ行きかひて、はなやかなりしあたりも、人すまぬ野らとなり、さびしかりしところも、市なすちまたとなり、げに朝に夕をはかられざるぞ世の常なる。今そなたの、夕方を願みしは、げにかげろふの、夕をしらず、うつ蟬の秋をさとらざるが如し、日の光は、そなたの長き心をまたず、わづかのまにかく變りしは、そなたの心を誡しめんがためなるべし。されど、兼好法師の、萬の事は頼むべからずとこそはいひたれ、と、いひければ、失望のおも丶ちにて立ちさりぬ、其さまの、をかしけれど、庭にのこりし淸き雪を、硯にうけて、かくはものしつ。

三谷起美子

ふるさとにありし昔は、深雪の中に埋れて、寒くはあれど、いと樂しきものとのみ思ひしに、都に出で丶は、絶えて見ざりしを、今日は、めづらしく、あかつき方より、ちら／＼と降り出でぬ。されど、隣の人ども、起き出で丶、あしきものこそなどいひしらふめり。見わたせど、所せき庭も、池といはず草

木といはず、一面に降り積りて、白妙にさえわたりたるさま、目もあやなるばかりなるに、なとかうしも面白きながめを、彼の人ともは、あしきものとはいふらんと、ひとりごとせられぬ、げに所かはれど、人の心もことなるにや。

田津木久子

年立ちかへりてより、寒さのいとたへかたうて、いまた梅の梢も、つぼみのいとさゝやかにて、霜かれふしたる庭の面のあはれなるなと、何となく物たらぬ心地のみして、いとさう〳〵しう思ひ渡りしに、けさおきいててみれは、かのさひしかりし梅の梢は、はやう盛りとなりたるやうにもはれ、すさましかりし庭の面は、いとも清らに白かねをしきたらんやうにぞ、雪の降りつもりたるにはなりたる。よへふりいてたりしもしらていねしに、いつのまにかく積りけんといとうれしう、さう〳〵しかりし心も消えはてゝなん、あはれ、この雪よ折みるまゝに、心までも清らかに、すが〳〵しうなりゆき、いふせきいほりも、玉をしきたるかとあやしまるゝはかり、野山のけしきのいひしらすをかしきのみかは、かくこの雪の多く降り積るはとゆたけき年のしるしなりとて、みたみらも、日毎に待ち渡れるとかきけは、けふはいかによろこひてかあるらんなと、思ひやりて、いみしうゝれしさのまさりてなん。

梨本信子

落つれはおなじ谷河の水とはいひけむを、雨霰雪と名を異にしては、とり〴〵に、何れはあれど、猶雪こそいとゆかしき者なれ。ふる屋が軒の五柴よりはじめて、四方の梢には、匂はぬ花かとも見るべく、宮もわらやもおしなべて、いさゝかのわいだめなく、降り積りたる、神のいがきには、ゆふかけ添へしかとも見えて、其清く麗しき姿よ、古より雪をめづる人多かるを、誰かは其潔き色をめでざるべき。すだれかゞべき高樓ならず、雪を翫びし梁王の苑にはあらねど、さすがにまた軒をつらねし都大路とは異りてはる〴〵と見やらるゝ片山里のすまひは、雪の朝しもいさゝか住むに甲斐ある心地して、銀河沙漲三千界とか、から人の吟じけむも、かゝるをやいふらむと、そゞろをかしきに、雪見にとて出でたりし人の、歸り來つゝ、今年は例よりも雪の多からん、よ

べ彼處の電信柱も倒れけり、ろこのもなど語るに、さても北の極てなる國々に、雪に埋る丶人々、いかばかり託しからんなど、思ふ折から、さと音しつる方を見やれば心の友として、れはしたて丶し呉竹の、ふる雪に衣堪へで、操のふしの折れしなりけり。雪は豐年のしるしともいふなるを、何事も、すぎたるは及ばざるにはしかざりけり。

藤林ます子

年はいつしか新まりて、心のみは、何となく長閑に覺ゆれども、尙寒さ日につよく、堪へかたくなむ。今朝より催し居たる雪の、夕暮に至り、一層烈しくなりて、冬かれの淋しきわか園も、しばしの內に、時ならぬ花や咲出けむと思ふ斗にふり積り、見渡すかぎり、しら絹しきたる樣にて、いとも〳〵麗しく、彼の淸少納言の、簾を捲けし古事も、かゝる時にやありけむと思ひいてなどしては、さすかに、寒さも打わすれ、軒近く進みいでゝ、あかぬなかめにしばし時うつししころ、我なからをかしかりし。

佐藤よし子

雪ふり來しと、うなゐ等が、喜びいさみ呼ぶ聲に、やをら窓あけながむれば、ひら〳〵〳〵と舞ふさま、まことにおもしろく、花のちるかとうたがはれ、木々の梢にかゝりては、花咲きしかと思はれ、破れ家の上につもりては、玉の臺と見せ、またゝく隙に、野も山も、庭も籬も、一やうに、みな白布の衣きたらん如く、眞白ならぬ隈もなく、其美くしさ、まねびたてんも言の葉たるまじうなん。されど、雪やみ、雲はれて、空の靑きに、日輪の光りまばゆくかゝやけば、梢の花も、たちまちに、もとの裸となりぬべく、玉の臺も、野も庭も、またれひ〳〵に、さきの姿に戻るめり。世の榮耀榮華の夢とは、此雪の如けんかし、あな鑑るべきにこそ。

服部かつみ子

何心なく開くねやの戸に、月さむる乍り熊れぬるは、雪のあしたの景色にこそ。空はぬくくふが如く晴れ。渡りて、風もさわやかに、昨日まで落葉にうもれし庭の、あともなく淸められ、枯木は時ならぬ花を咲かしめ、敗れしまがきは、うづもれて白妙の山を築ける樣、見渡すかぎり、雪のまに〳〵まかせたるさてもうるはしく、ふる舞ひしものかな、雪こそ浮世

を知らてあるらん、ことわりなりや、そのきよく潔き、たとへつべき物もなきを、雪こそうらやましけれ、嗚呼雪になりたや、雪の如き心になりたやと、思はず口走れば、傍より、妹のいひけるは、彼の泉水を見給へ、かはかりの雪に、少しの跡もなく、色さへ留めて消ゑ行きしに侍らずや、雪は水には中々まゝならぬをかこち侍らんと、妾は、否とよ、雪の如く潔よければこそ、消ゑて浮瀬をのがれしなれ、凡ての世の人も、雪の如く潔きよからんには、うきもきゑ、こと一として思ひのまゝに成りなん、さこならずや、われ身もつとめはげみ給へ、妾もつとめん、雪になれとりたまひぞと、わけもなくうち語りつ。

いとはしな朝日まつまの命をも
あくまで清き雪と消ゑせは

守山比古子

雪のおもしろうふりつもりたる、朝ぼらけのけしき斗り、すが〳〵しうたのしきはあらし。みわたすかぎり、白妙にて山のははさらなり、あさましう冬枯せし梢とも、さまことにをかしう、花さき匂ひたる春のあしたのこゝちぞする。ひぎのむら立かくれにて、れいはよくも見ゑざりけるしつがふせやも、玉のうてなとばかり、うちみまがへられたるこそ、こゝろことにをかしけれ。やう〳〵もゑいでそめし麥などの、ふりつもりたる雪の中より、青やかにさしいでたるなど、花もみぢのちりそむる頃にもまさりて、あはれさ深うおぼゆ。には中にいぬのかけなしたるも、いと興ありかし、學の庭につどふわらはへどもの、三たり四たりゆきかひたる、ちひさきつのあとの、こゝかしこにつきたるも、こよなうをかしきや。

懸田ふさ子

霜のうちより、いみじう、吹すさみし、風もやみ、軒端にさわぐ、鳥の聲だに聞ゑで、靜けかりければ、とく、起きいで、朝戸あくれば、大空は晴れわたりて見渡す限り、野も山も、皆白雪にうづもれて、さながら、白銀の世界とこそはなりにけれ、わきて、園生の木々の、梢も、たわゝに、つもれるさま、いとあはれにて、花とな見ゑそ人もころをれど、何がしのよまれたる歌など、思ひいでらるゝまゝに、ひ

むがしの山より出つる、朝日の、いとうらゝかに輝きぞめれど、一しほの景色まさり、日頃の憂をもうち忘れ、心の底まで清くなりぬる心地せられてなむ。

塵ひぢの限なき雪の清らけく
　あらまほしきは心なりけり

内田つる子

きのふ今日は、さえかへりて、空のけしきもおだやかならぬに、ひるつかたより、雪降り出しぬ。夜に入りては、一入まさりて、ふすまもるふゞきには、身も凍るばかりなり、されど、柴の戸音づるゝものもなくて、一人うつみ火かきおこして、世のありさまなど、思ひめぐらすに、「風も吹きあへずうつらふ人の心」と、古人もいふめれど、實にたのみかたき世やと、思ふにつけても、我身に積る憂きことは、降る雪と共にまさり行くにぞ、いと胸くるしき折しも、吹く風の、つとさわがしかりけれど、立ち出でゝ見るに、いつのまに、月や出でけむ、あたりくまなくてらし渡りぬ、あはれ此雪の如く清からましかど、浮世の濁にもそまざらむをとて、やをら庭におり立ちて、雪を手に掬れど、實にあわ雪の名にたがわず、いと清くも消えむとするに、いまゝで濁りし我心も、み雪と共にとけ終りぬ。あなありがたの雪やと、うちつぶやきぬるもをかしや。

宮本あさ子

雪は、とよとしの、きざしと聞きつるに、いかなれど、今年はおそきとおもはれしを、今日はしも、ひる過ぐる頃より、うれしうふりいで、たそかれには、はや、をちの鳥の見やすしといふばかりの景色とはなりぬ。かゝる折にこそ、世の人は、うるはしき言葉の花も咲き出つるならめ。いで、おのれもとおもへど、まなびなき身は、とみにもいでず。とかくするうち、庭のたかむらのあなたざまに、かまびすしき聲す、窓おしあけて見るに、うなゐらあまたうちよりて、いくさ遊びなせるにて、吹雪の中に、いまや敵みかたいりみだれ、ときの聲をあけ　おのもおのも雪つぶて打ちあふさま、實にいさましきに、いにし年、我が御軍の、から國にてのいさをゝ、おもひいでて、そゞろにしのばれて、

いさましく雪をもしのぐ若竹の
　末の操のたのもしきかな

失名

春をほめ、秋をたゝふる又は多かれど、冬をめづるはいとまれなり。されど　まことにをかしからざるにやといふに、いかで〳〵、月雪花とならびたゝへらるゝものを、雪のおもしろうふりたりしこそ、月花にもおとるまじくたのしけれ。よべより、寒さいちじるく、身もきゆる心地のせられしが、とくより起きいで、東の妻戸あけみれど、こはいかに、高殿しづかやをもわかたで、一夜のうちにしろがねと化し、木々の梢に、時ならぬ花を咲せて春に知られぬ景色なり。殊に、年のゆたかなるしるしなどいひて、雅人はさらなり、賤人さへよろこふぞめでたき。無邪氣なるわらべの、雪に玉など作り、手の凍るをもいとはず、走りまはるおもしろさ、あゝ雪は幼きわらべの得意のものなり、おうなおきなは日桶をのみ友として、雪玉まろばす勇氣もなくみそもじあまりのことのはを口ずさむぞ、いとたのしけなる、其思ひはとり〲なれど、皆一つとしてをかしからざるはなし。

鷹取久子

ゆきのあしたこそ、とり〲にをかしきものなれ。きのふ迄も、冬枯れてさびしかりつる前栽も、一夜がほどに、白妙の花さき、松のみどりも、野山のけしきも、さまかはりてめでたくなん。さるに、日影うらゝかにさしいでぬれど、雪げの道あしくなりて、行く人毎に、いひのゝしるも、あさましうあはれになん。

鈴木まさ子

夜も深けぬるか、啼きわたる雁かねも、さだかに聞え、吹く風の、柳の枝をなびかせて、障子をさら〲と打ち、透もる風も身にしみ、雪もやふりいてん空のけはひなり。埋火もきえはてしかど、書を閉ぢ、ふしどに入りしに、明方になり、寒さいや増し、肌に粟を生ずる程なるにぞ、安き思ひに寐ねられぬものから、やう〲起きいて、妻戸をかいやりなかむるに、野も山も、一面白妙に埋みはて、賤の伏屋も、白銀もて飾りたらん宮居の如く、かまどたく烟の、はの花の〲と雪けにうつりて立ち上り、木々の梢はならねど咲き、をり〲ふき來る風に誘はれて、春、落ち散る風情は、をかしくも又うらめし。何處

の小狗ならん、白銀敷きし如き雪を、いと快よげにまろび戯る樣、をかしともおもしろし。雀からすの、今日の朝げにあさりかね、いと憂めしげにさゝやきあふも　うたてし。籬にかゝりし雪をすくひ上けしに、時節からにや、軟かにとけやすし。家並多き都には、家にありて、雪見んなとは、いとかたきことなり。それにかへ、田舍は火鉢をかいくみ、座なからに、山のさまひろ〳〵たる田面を眺むる面白さ、ねも云はれぬけしきなり、

雪見れと中々よけれ田舍こそ
　なとて都に劣りやはする

林　久　子

よへより、ふりつゝきたる雪の、深くつもりて、をり〳〵雪折のおとの聞ゆるのみなる、山さとのけしきを、ふりはへて問ふ人もなし。ひとり、まとのとを、いく度となくおしひらきてなかむるうちに、冬の日あしのみしかくて、はやくれ初むる夕へのさひしさに、はかなきことのみ思ひ出さるゝをりから、隣のかたに、少女子の聲にて、千代に八千代と、ゆく末をみささの竹のしたかけに、我子はくゝむあしたつの、雪にふしみの夕まくれとも、あはれにうたひいてたるは、幼心にも、此雪を見て、常盤御前のむかしをおもひ出でたるにや、とおもへは、あはれさまさり、雪折の音も、一しほみにしみてなむ。

宗岡　しゆん子

軒のすゞめの聲に夢さめて、閨の板戸をおし開けて、一夜のうちに、世はしろたへにぞふりうづめたりける。かゝる雪を見れと、わがをさなかりし時の事こそ思ひ出らるれ。父に手をひかれ、男の子らか雪達磨なとを作れるを見に行きしは、今の樣なりしが、早父母もいとう老ませり。こゝより、我古郷は、ひときは寒き山里なれと、この雪をいかにしのき給ふらん。つく〳〵思へと、古しへの人は、親のため雪のうちたけのこをほりしと聞きつるに、今妾は、學のため、親のみ許にあらで、朝夕のみけしきをたにねうかゝひまつらず、海山の深き高きめぐみの、一ッをもまだむくいかへさぬは、いと口をしと、今さら思ふもおろかなりけり。

新田のり子

いつもよりいたくひえわたりたるふすまの風は、今

朝降り積る雪なりけむ、四方のながめは、いはんかたなきに、きるが如き寒さをも打忘れ、こゝろも何となく浮かれ立ちて、雪見のついでに、葛飾なる友とはゞやといへど、おなじ學びの友どち、われもとて共に立ちいでぬ。途すから、童の集ひて、雪なげするもあり、くるひたはむれて、雪うちかつく小犬などいとおもしろく、やかて東橋にかゝり、はるかに堤の方を見やれは、一面の櫻樹は、ときならぬ花を咲かせたる樣にて、思はす歩みを橋の中程に止めたるに、川風も何かあらむと、暫く打なかめたる、女にはあらぬわさかなど、爪はしきせられむかし、斯くてまた堤に來て見れは、かたへの掛茶屋には、歌よまんとあんする人あり、かたへにはひさごの酒にほこりかなる老人もあり、われらもともに、かなたを打見やれは、折しも風は眞乳山の木々の梢に吹きあれたるに、さながら彌生の花の散るかと見えた る、えもいはすをかし。岸邊には、とまかけたる小舟につもれる樣、中瀬あたり雪に聲あるかとうたがへは、あまたのかもめのあなたこなたに浮へるなど、繪にもかゝれましき景色に、しらず〲時をうつして、友の家路さへ打忘れはてぬ。

雪つもるあしたに見れはうれしのゝ　森はさくらのはやしなりけり

かけまくもかしこけれど　皇太后陛下かくれさせ給ひぬる夜　小川　直子

月かげもくもかくれにし大そらに　ひかり無き世を仰くかなしさ

松影映水　佐々小琴子

大ゐかはあをかき淵にうごきなき　かげこそうつれきしのたか松

出田香川子

逝水にふた葉のまつのかげみえて　淸きながれはいく千代かへん

德永萬壽子

ときはなる松のみさををゆく水に　うつすやみよのさかえ成らん

田代　艶子

御めぐみの露にうるほふ松が枝の　かげうつる池は浪しづかなり

千歳へん松のみさをのたふときを
清きながれにうつしてぞみる　田代　綾子

常はるる松のみどりは千代八千代
うつりてきよき谷かはのみづ　長田　年子

なみたてる松の八千代の深みどり
みよすみの江の水にうつらふ　佐々有鄰子

ときはなる松のみどりの色ふかく
清水に千代のかげぞうかべる　澤田　春子

なみたたぬ御池にうつる老まつの
かげは八千代の色ぞみえける　木川　里子

きよらかにすみゆく水に松のかげ
さしかかりつつうつりける哉　右田富士子

大君のちとせのかけをあふかはや
み池にうつるまつのみどりに　畠山千代子

水のおもにかけをうつして君か代の
千とせをみするからさきの松　畠山百合子

いけみつに君か千年のかけみえて
ふかみどりなるにはのわか松　田倉秀代子

浪たゝぬいけのみぎはのいはね松
やどれる影もうごかざりけり　河野　文子

あしたつのあさる小川の水きよみ
千代のかけすむ岸のまつか枝　春永己巳子

池水にかけをうつしてよろづよも
つきせじ松のふかきみどりは　有坂　清子

さくすゝの五十鈴の川の水のおもに
うつるかけさへ千代の松か枝　彦坂あい子

かめ山のふもとの川にかけうつる
岩根のまつはいくよへぬらん　失　名

都雪

ゆきゝする志けき大ちも人絶えて
あとたにみえぬ今朝のゆき哉　楠　精子

炭竈

やく炭のいふせき業もよそめには
なほ面白くたつけむりかな　木村　兼子

山家鶯

すみなれてさびしさしらぬ山里に
友とたのむはうぐひすのこゑ　町田　鶴子

竹間鶯

わかやどの庭のゆき間のくれ竹に
ちよ〳〵となくうぐひすの聲　中島　房子

元旦　大森純子

堪へかねし寒き風さへはつこよみ
ひらきそむれは忘られにけり

殘雪　白井球子

かすみ立つ野末の松に今もなほ
つれなく殘るゆきもみえけり

朝雪　小川金子

あさぼらけ見渡す四方はふる雪に
白かねしけるこゝちなりけり

立春　畠山千代子

立ちかへる春はこゝろも長閑にて
きのふの世ともおもほえぬ哉

梅花先春　仝

あら玉の年のはしめにあつさ弓
はるをもまたてかをる梅か香

早梅　春永己巳子

吹風の香を送らすはふりつもる
ゆきとまかはん梅のはやさき

早鶯　仝

ふりつもる雪を花とやおもひけん
古枝のうめにうくひすのなく

服部かつみ子

なき友の文をみて

せめてもの思ひ出にせん亡き人の
面なつかしきみつくきのあと

二月　廿日　歌……湖上霞　文……電話

三月　五日　歌……餘寒　文……出産を祝ふ
　　　廿日　歌……田家梅　文……楽しみ

四月　五日　歌……野遊　文……[illegible]
　　　廿日　歌……對花言志　文……[illegible]海へ出て立つ人をおくる

五月　五日　歌……新竹　文……新茶をおくられし返し
　　　廿日　歌……夕水鷄　文……蛙を聞く

六月　五日　歌……曉郭公　文……雨中待友
　　　廿日　歌……夏[illegible]　文……朝顔

富士谷御杖大人著

土佐日記燈

菊判
大和綴
美本

近刊

富士谷御杖の翁の、斯の道の學に至り深かりしは、今更にいはず、そのものせられし著書はかゝるが中に、燈といふもの、古事記燈、萬葉集燈は、翁か在世のころに、ゑり卷となりて世に廣ごりしも、この土佐日記燈は、はやく文化の末つかたに成れるものなるが、さる由ありて時の粟田の宮の請はせらるゝに、稿本のまゝに奉られりしを、後いくばくもなくて、翁ははかなくみまかられにしかば、さながらに埋もりて、流布せずなりにき、世の學者、みなほしうすれども、さるよしもなくて、空しく年經ぬることを、こゝに數十年、さるを翁の男元廣ぬしが、さるべき筋より辛うじて、寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたび我が社にて、摺り卷にものして、廣く世に流布せしめてんとす、そも〳〵この燈は、世にありふれたる注釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしは、かりそめのすさびにあらず、土佐の守に任されしをふかく憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになして、深き心はその言葉のうちにふくめたり、といふをもとゝして言詞は、更なり、文意をもいと委しくときなしながら、いと廣く考證をさへ引き出でられたり、この書今より世にひろごりなば、學者を益することも尠からざるべく、はた、翁の靈も天翔り國翔りて、うれしとよろこび給はん、やよやの斯道の學に志あらんものは、いちはやく繙きてよかし、

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　國光社

國光

●毎月一回十日發行
●定價一冊金十三錢 六冊金七十五錢 十二冊金壹圓五十錢 郵稅金一錢五厘

國光の天下に立つ茲に九星霜外寰宇の大勢を察し內域中の要務を究め專ら我邦固有の道義を發揮し國體を尊重し士風を激厲し百難を排して一誠を持し敢て流潜の表に卓立せるは是れ本誌の本領にして聊か自ら標識するに足るべきを信す而して今や時運一轉吾人の素志を伸ふるの事業漸く多岐を見る故を以て吾人は這回本誌の面目を一新し益々自ら信する所の主義精神を實行し特立正議以て天下同志の眷顧に酬ひんと欲す若し夫れ誌上收むる所の論說記事か警拔森

嚴理氣相兼ね奇趣妙致を罄して餘なきは讀者自ら之を諒せむ左に最近刊の目次を掲く

國光第拾參卷第四號目次　（二月十日發行）

孝明天皇御遺德

定價金貳拾五錢

皇考孝明天皇陛下は不世出の　聖皇なり不幸にして事蹟尙湮晦に屬し爲に　聖德盛に內に耀きて未た外に現れず著者切に之を慨し爰に宸翰秘書及先朝に奉仕せし雲客月卿幷諸官人の實見談等を參照して此書を爲し汎く逸事遺聞を擧けて以て先皇の聖德を明にす今茲　先皇三十年御靈祭を行はせらるゝの時に方りて　聖德を奉頌するを得るは本社の私に光榮とする所也

仰後代の臣民をして維新の鴻業を扶植し奉るの本分を全ふせしめむことを以て任とせる敎育家に於ては是非とも本書を反覆熟讀して此の明治照代の由來する所を審にし以て平素敎養の資料とせられむことは本社の切に企望する所也

實に本書の如きは全國各小學校に於て必ず備付け置かるべき最緊要なるもの也

目　次

前編

後編

一、聰明

○不世出の英皇
○天皇の御宇の如く內外多事なりし時は古來未だ曾て無かりし事
○當時の諸侯伯は其臣下の力を借て國事に盡瘁せしも天皇は多くの輔弼者を有し給ふ能はざりし事
○當時公卿及諸藩の情態
○天皇大に言路を開き給ひし事
○幕府朝廷を羈束し奉りたる事
○幕府廢帝の典例を探索せし事
○天皇國難を以て躬ら責め遂に讓位の御決心ありし事
○天皇の宮門外に出で給ひしは治世中僅かに二三次に過ぎざりし事
○蒙古の來襲と黑船渡航、及び建武の中興と明治の維新との比較
○明治維新は先皇今上兩陛下の大成し給へる偉業なる事

二、夙成

○栴檀は二葉より馨し
○和氣淸麻呂の誠忠を感し給ひし事
○「德若萬歲」(述語の解答)
○武將を指揮するの御遊戲
○將軍上洛の用具に感憤し給ひし事
○御幼時の御希望は登極の後に及むで着々貫徹し給ひし事

三、慷慨(上)醜夷掃攘

○國安を祖廟山陵等に祈り給ひし事
○加茂石淸水行幸は維新大業の關鍵なる事
○攘夷の術を講し給ひし事
○無謀の攘夷を厭はせ玉ひし事
○徒らに外國を嫌忌し給はざりし事

○外政刷新の大御心より攘夷論を是認し給ひし事

○假條約勅許御遺憾の事

四、慷慨(下)皇權回復

○幕府に憤慨し給ひしは一日の故にあらさる事

○幕府の無能を看破して之に依頼するの念を絶ち給ひし事

○幕府を眼中に措き給はさりし事

○公武一和論

○皇妹降嫁を嘆かせ給ひし事

○外交内治の權は明治以前既に朝廷に復歸せし事

○天皇は單り維新大業の基を啓き給ひしのみならす亦大半之を遂行し給ひし事

五、孤憤

○天皇と憂を共にするの朝紳極て少かりし事

○深夜密かに國事を議し玉ひし事

○朝紳時ありては女裝徒歩して入闕したる事

○祈禱に託して僧侶を召し之に國事を諮ひ給ひし事

○密かに宸翰を朝紳に賜ふて國事を諮ひ給ひし事

○近衛家に賜りたる宸翰百餘通近日發見の事

○某公卿の述懷

○御信任を蒙りたる朝紳

○靑蓮院宮及ひ近衛公三條公等に嚴譴を加へたるは叡思にあらす、從て聖德の累を爲すに足らさる事

○近衛公を慰め給へる宸翰の大意

○當時柔弱の公卿天皇の風を聞て起ちたる事

六、撫御

○攘夷と討幕との輕重

○天皇漸次幕府の權を殺き給ふて全然之を討滅し給はさりし事

○諸侯に倚頼し給ひし事
○天皇と薩藩
○島津齊彬に密勅と勅諭とを賜ひし顛末
○天皇と長藩幷に長藩の榮枯
○征長は叡思にあらさりし事
○天皇と水戸藩
○天皇と會津藩
○天皇か會津藩に倚り玉ひしは薩長を牽制せむとの大御心なりし事
○天皇決して一二藩に偏頼し給はさりし事

七、豁達

○言路洞開
○有司聰明を壅蔽し奉りたる事
○草莽處士の建言を許し玉ひし事
○特に『御假建』なるものを設けて民間の忠言を徴し玉ひし事
○眞木和泉奉る所『勢』字の建言を嘉納し玉ひし事

○廣く諸侯伯の意見を徴し玉ひし事
○先朝の政治は最美の立憲政治なる事

八、忍耐

○供御の料を多く上らざるは幕府の政略なる事
○先朝の財用は御困難なりし事
○禁裡荒廢の事
○御飲食の菲薄なりし事
○酒を嗜み玉ひし事、幷に酒肴乏しく且つ不味なりし事
○献上物を賞味あらせられし事(實例二件)
○御料の酒は粗薄なりし事
○故岩倉公所司代を詰責せし事
○御膳献立(圖解)
○本途直段の事
○十兩以下の金錢に窮し玉ひし事
○供御の料総額幷禁裡御臺所費總額
○幕府及諸藩等より金穀献上の事

發行所
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
國光社

伯爵 東久世通禧 閱
伯爵 副島種臣 閱
西澤之助 編

高等女學讀本

全部十二册卷一、二、三、四、(第一、第二、學年用)既刊

高等女學校規程の昨二十八年一月を以て發布せられし以來各地方到る所女學校の新設を見るに至りしは寔に女子敎育の爲に賀すべきことゝいうべし然るにその六學年間の敎科に充つべき適當なる敎科用書の世に乏しきは當路者の常に遺憾とする所にして已むを得ず從來の國文讀本類を斟酌して之を課するもまゝ障礙なき能はず編者こゝに見る所ありてこの書を編し大にその材料の撰擇に注意し主に婦女子の淑德美風を養成し兼ねて國語國文の正格なるものを練熟習得し德行學藝共にその完全の域に達し良妻賢婦たるの基を固くせしめんことを庶幾したるものなり敎育家諸彦乞ふ本編を一閱して女學校國語科の用書と採用せられんことを

東京京橋區築地二丁目廿一番地
發行所 國光社

女鑑第百二十五號目錄

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕〔明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊（三ヶ月分）	五十五錢
	十二冊（半年分）	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行金二十錢	

明治三十年二月二日印刷
同年二月廿日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所（電話番號本局八八）國光社
（印刷所 東京國光社印刷部）